

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（66）

国道448号線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

後 迫 遺 跡

2003年12月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序 文

この報告書は、平成8年度に実施した国道448号線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書です。

発掘調査は、県土木部の依頼を受けて県立埋蔵文化財センターが実施しました。

調査では、古代から中世にかけての遺構・遺物が発見されました。これまで、周辺では古代から中世にかけての発掘調査は少なく、今回の報告によって地域史に新たな成果を加えることが出来たものと思います。

発掘調査から報告書作成に至るまで関係機関並びに多くの方々からご協力をいただきました。ここに感謝申し上げます。

最後になりましたが、本報告書が広く埋蔵文化財の保護に活用されることを願っています。

平成15年12月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長 木 原 俊 孝

報 告 書 抄 録

ふ り が な	うしろざこいせき							
書 名	後迫遺跡							
副 書 名	国道448号線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻 次								
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	66							
編 著 者 名	松尾 勉 川元禎久							
編 集 機 関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175番地1 TEL0995-48-5811							
発行年月日	2003年12月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺 跡 番 号		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
うしろ ざこ い せき 後 迫 遺 跡	そ お ぐんおおき ぎょう 曾於郡大崎町 よこ せ あぎうしろざこ 横瀬字後迫	464686		31° 25' 50"	130° 59' 58"	H8・6・17 ～ H8・8・9	1,315㎡	国道448号 線道路改良
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代		主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項
後迫遺跡	散布地	縄 文 時 代 弥 生 時 代 古 墳 時 代 古 代 中 世 近 世		豎 穴 建 物 跡 溝 状 遺 構 土 坑		縄 文 土 器 土 師 器 石 庖 丁 滑 石 製 石 鍋		



遺跡位置図 (1/25,000)

例 言

- 1 本報告書は、国道448号線道路改良事業に伴う後迫遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、鹿児島県土木部から鹿児島県教育委員会が受託し、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査における測量・実測・写真撮影等は、平成8年度の調査担当者がおこなった。
- 4 整理作業は県立埋蔵文化財センターでおこなった。
- 5 本書掲載の測量・実測図、出土遺物の実測及び浄書は、整理作業員の協力を得て整理担当者がおこなった。
なお、出土遺物の実測及び浄書の一部は、
(株)九州文化財研究所に委託した。
- 6 本書の執筆分担は次の通りである
第Ⅰ章～第Ⅳ章 第1節 黒川忠広
第Ⅳ章 第2節 松尾 勉・川元禎久
池畑耕一・黒川忠広・上床 真
第Ⅴ章 上床 真
- 7 出土遺物の写真撮影は、横手浩二郎の協力を得て、黒川忠広がおこなった。
- 8 遺物番号は通し番号とし、本文及び挿図・図版の番号は一致する。
- 9 本書に用いたレベル数値は全て海拔絶対高である。
- 10 本書の編集は、松尾・川元がおこなった。
- 11 出土した遺物は、県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する予定である。

本文目次

序文	第Ⅲ章 調査の概要	13
報告書抄録	第1節 発掘調査の概要	13
例言	第2節 層位	13
目次	第3節 整理作業の経過	13
第Ⅰ章 調査に至る経過	第Ⅳ章 調査の成果	17
第1節 調査に至るまでの経緯	第1節 遺構	17
第2節 調査の組織	第2節 包含層の遺物	19
第3節 調査の経過	第Ⅴ章 調査のまとめ	37
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	第1節 遺構について	37
第1節 遺跡の位置と自然環境	第2節 遺物について	37
第2節 歴史的環境		

插图目次

第1図 周辺遺跡地図	12	第9図 古代・中世の遺物（1）	25
第2図 土層断面図	14	第10図 古代・中世の遺物（2）	26
第3図 グリッド配置図	15	第11図 古代・中世の遺物（3）	27
第4図 遺構配置図	16	第12図 古代・中世の遺物（4）	28
第5図 遺構実測図	18	第13図 古代・中世の遺物（5）	29
第6図 遺構内出土遺物	19	第14図 近世の遺物（1）	30
第7図 縄文時代の遺物	20	第15図 近世の遺物（2）	31
第8図 弥生・古墳時代の遺物	22	第16図 石器	32

表目次

第1表 周辺遺跡地名表	11	第4表 遺物観察表（3）	35
第2表 遺物観察表（1）	33	第5表 遺物観察表（4）	36
第3表 遺物観察表（2）	34		

図版目次

図版1 竪穴建物跡・溝状遺構検出状況		図版6 溝状遺構完掘状況	
竪穴建物跡内軽石出土状況	39	遺物出土状況	44
図版2 竪穴建物跡完掘状況		図版7 遺構内出土遺物	45
軽石石列検出状況・土坑検出状況		図版8 縄文時代の遺物	46
土坑完掘状況	40	図版9 弥生・古墳時代の遺物	47
図版3 溝状遺構検出状況		図版10 古代・中世の遺物	48
溝状遺構埋土の状況	41	図版11 古代・中世の遺物	49
図版4 溝状遺構の切り合い状況	42	図版12 古代・中世の遺物	50
図版5 溝状遺構完掘状況	43	図版13 近世の遺物	51
		図版14 石器	52

第1章 調査に至る経過

第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、鹿児島県土木部道路建設課は、国道448号線道路改良事業を計画していた事業区域の埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育委員会文化財課（以下文化財課）に照会した。照会を受けた文化財課では、平成7年度に事業区内の分布調査を実施した。その結果、5,945㎡にわたって遺物の散布が確認された。

この結果をもとに、遺跡の取り扱いについて県土木部道路建設課・文化財課・県立埋蔵文化財センターの三者で協議をおこない、確認調査を実施する運びとなった。確認調査は、平成8年6月17日から実施し、対象地の内1,315㎡について遺物包含層が確認された。この結果を受けて、現状保存や設計変更が不可能であることから、記録保存のための緊急発掘調査を実施することとした。発掘調査は、確認調査に引き続いて実施され、平成8年8月9日まで実働34日間おこなった。

第2節 調査の組織

発掘調査

起回事業主体	鹿児島県土木部道路建設課				
調査主体者	鹿児島県教育委員会				
企画・調整	鹿児島県教育委員会文化財課				
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長	吉	元
	〃	次長兼総務課長		尾	崎
	〃	調査課長		戸	崎
	〃	調査課長補佐		新	東
	〃	主任文化財主事兼第二調査係長		立	神
調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事		長	野
	〃	文化財研究員		有	馬
調査事務担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主	査	成	尾
	〃	主	査	前	屋敷
	〃	主	事	追	立

報告書作成

事業主体者	鹿児島県土木部道路建設課				
調査主体者	鹿児島県教育委員会				
企画・調整	鹿児島県教育委員会文化財課				
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長	木	原
	〃	次長兼総務課長		田	中
	〃	調査課長		新	東
	〃	課長補佐		立	神
	〃	主任文化財主事兼第一調査係長		池	畑
	〃	主任文化財主事		中	村

整理担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	松尾勉
	〃	文化財研究員	川元禎久
	〃	〃	上床真
調査事務担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	総務係長	平野浩二
		主事	福山恵一郎
報告書作成検討委員会	平成15年10月7日	所長ほか8名	
報告書作成指導委員会	平成15年10月7日	調査課長ほか5名	
企画担当者		黒川忠広	

発掘調査作業員

有元タエ 有元弘一 井崎定 今給黎シズエ 入江田洋子 上野ハル 上橋チズ 後迫ツミ
 内門マリ子 梶シマ子 河口あすか 神田ノシ 久保敬二 蔵満春海 西郷昌子 坂本熊蔵
 坂本忠夫 佐土原勇男 下諸サチ 下諸タミ 谷山則男 寺園実 堂園ムツ 時吉ナシ 中村洋子
 西浜栄 西浜エチ 西宮一成 西宮レイ 原口サツ子 東平鉄兵 東平一美 東平ノリ 久末清美
 穂園サチ子 本村フジエ 諸木守 山内ミチエ 湯又かずみ

整理作業員

石原啓子 迫田かおり 末廣みゆき

なお、発掘調査から報告書作成にかけて池田榮史氏、本田道輝氏よりご指導を賜った。記して感謝したい。

第3節 調査の経過

6月17日 機材搬入

18日 雨天のため作業中止。作業環境整備のためプレハブ前にシラスを搬入した。

19日 1・2・5～7トレンチを設定して掘り下げをおこなう。

20日 6トレンチを拡張して調査を実施する。

21日 雨天のため、午前中で現場作業を終了させる。

24日 B-13・14区の掘り下げ。

26日 B-13・14区を継続して掘り下げる。重機により、5トレンチ拡張。

27日 B-13・14区で溝状遺構を検出する。8トレンチを設定して掘り下げる。

7月1～3日 雨天のため発掘作業を中止した。

4日 B-13区溝状遺構掘り下げ。

8日 B-15区表土剥ぎ。

11日 B-12区で軽石石列が検出される。

15日 B-13区で竪穴建物跡が検出される。検出状況の写真撮影及び掘り下げを実施。

16日 B-13区の竪穴建物跡内から軽石が集中して出土する。

17日 台風接近のため耐風養生をおこなう。

26日 現道部分調査のために迂回路を設置する。

8月7日 一部埋め戻しを実施する。

9日 機材等の撤収。発掘調査を終了。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と自然環境

大崎町は鹿児島県の南東部、曾於郡の南西部に位置している。東は有明町、西は鹿屋市、肝属郡串良町、東串良町、北は大隅町、輝北町に接し、南東は志布志湾に臨んでいる。

志布志湾は、宮崎県都井岬を湾口とする半円状の湾であり、砂丘と岩礁海岸が交互に連なる。大崎町は、湾奥の志布志町から東串良町までの約16km、幅1～1.5kmの砂丘海岸のほぼ中央部にあたり、菱田川河口から南西に弧状を描いて東串良町に至る約7kmの海岸線を持つ。

南北に細長い本町では、南部は志布志湾から北に向かって緩やかな勾配をなし、北部は標高150mから180mの丘陵地帯となっている。さらに、北端部に至っては谷間の多い起伏の激しい地形を構成している。また菱田川、田原川、持留川が南流して志布志湾に注いでいる。南部は、この3河川に沿って水田地帯がひらけ、その中間の大地が畑地を形成している。北部は大鳥川が水源を発し、蛇行しながら有明町へと流れており、山林や原野の多い地帯となっている。

地質は、南九州特有のシラス土壌の上に形成された黑色火山灰土壌が多く、また水田の一部では泥炭層をなしているところがある。大崎町は志布志湾に面しているため、黒潮の影響を受けて温暖な気象状況に恵まれており、年間平均気温が17.2度、高温多湿で農作物の育成に適した風土である。

第2節 歴史的環境

大崎町における遺跡は、主に田原川、持留川、菱田川、大鳥川を臨む台地の縁辺部に沿って分布している。これまで、町内の歴史は現存する文献資料等に頼らざるを得ず、古代以前に関しては表面採集などで発見された遺物で推測するしかなかった。しかし、近年の開発事業の増加に伴い発掘調査の件数も増えており、発掘調査が進むにつれ少しずつ町内の歴史が明らかになりつつある状況である。各時代毎にその概要を述べていきたい。

旧石器時代に関しては、現在のところ確認されていない。しかし、周辺自治体では確認されており、今後の発掘調査によって確認されていくものと思われる。

縄文時代に関しては、発掘調査で遺構・遺物が確認されている例が少ないながらも存在している。二子塚A遺跡では、早期の塞ノ神式土器が出土している。また、陥し穴と思われる土坑2基が確認されている。平成10年から12年にかけて行われた金丸城跡の発掘調査では、早期の石坂式土器が出土している。下堀遺跡では、燃糸文土器がまとまって出土し、この他にも前平式土器をはじめとする貝殻文系土器が見つかった。

弥生時代に関しては、平成11年度に発掘調査された益丸字松原にある沢目遺跡がある。この遺跡では、砂丘に埋没した中期から終末期にかけての遺構・遺物が発見されている。調査対象面積は約1,500㎡であったが、この中で竪穴住居跡53基・土坑約20基・柱穴約180基などが発見された。また、出土遺物としては入来式土器や山之口式土器などが出土し、鉄製品、軽石製加工品も出土した。その他、須玖式の高坏・甕形土器も出土しており、九州北部方面との交流があったことが示唆される。この他に、田原川・持留川沿いには弥生土器片の散布地としての遺跡が多く点在し、特に河口付近に当たる横瀬地域では甕棺破片が採集されている。下堀遺跡では、鹿屋市王子遺跡で発見されたも

のに類似する大型の竪穴住居跡 2 基や方形土坑を中央に持つ掘立柱建物跡などが検出されている。

古墳時代に関しては、横瀬エサイ町に昭和18年 9 月に国史跡の指定を受けた横瀬古墳がある。古墳時代中期（5 世紀後半頃）の大型前方後円墳であり、県内では肝属郡東串良町に所在する唐仁大塚古墳に次いで 2 番目に大きい。平成 2 年に行われた測量調査で、全長160m、墳長132m、前方部幅72m、前方部長68m、後円部径64m、くびれ部幅48mであることがわかった。出土遺物としては、墳丘から円筒埴輪片、象形埴輪等が出土している。また、昭和53年に鹿児島県教育委員会文化課の範囲確認調査で周濠跡も確認された。その周濠内から須恵器片が出土し、これらは伽耶系陶質土器及び大阪府陶邑産の須恵器と言われている。濠の幅は12m～23m、深さは約1.5mである。墳丘の高さは、後円部が10.5m、前方部が11.5mであるが、後円部の頂上部に石室が露呈していることから、もともとの後円部は現在より高かったと思われる。被葬者に関しては明らかにされていない。また、明治35年に盗掘を受けた際に直刀と鎧と勾玉類などが出土し、石室内は朱塗りであったと言われている。

神領遺跡群の中にある神領古墳群では、現在、前方後円墳 4 基、円墳 9 基、地下式横穴墓 7 基が確認されている。6 号墳は全長43m、後円部径19m、高さ 3 m、前方部幅16m、高さ 2 mの前方後円墳で、後円部に内部主体がある。昭和37年に、地主によって、日光鏡・仿製獣帯鏡各 1 面が採集されている。昭和43年の調査では、主体は花崗岩質板石 6 枚を使用した組合せ石棺で、鉄剣、鉄刀、鏡等が副葬されていたことが判明した。

また、昭和35年には神領地下式横穴墓 1 号が調査された。調査の結果によれば長方形、家形の玄室で羨道部取り付けは妻入りである。副葬品は鉄剣 1、骨製筭 1、イモガイ製貝釧 2、内行花文鏡 1 で、県内で鏡を副葬した地下式横穴墓はここだけである。

昭和55年に大隅分布調査が行われたとき神領地下式横穴 3 号・4 号が調査された。また昭和62年には神領地下式横穴墓 5 号が調査され、イモガイ製貝釧が1対出土している。

平成 2 年に神領地下式横穴 6 号の調査が行われた。玄室内では、南側に歯が数本と、北側に大腿骨が残存しており、副葬品等は認められなかった。

大崎町における地下式横穴墓は、これらの他に飯隈遺跡群の飯隈地下式横穴墓群、鷲塚地下式横穴墓群がある。また、大崎町に存在する高塚古墳は他に飯隈遺跡群の飯隈古墳群に 9 基、田中古墳群に 3 基、野方の後迫古墳群に 2 基存在する。なお、神領と飯隈においては高塚古墳と地下式横穴墓は混在して分布する。

二子塚遺跡においては、平成11年度の発掘調査によって土師器、成川式土器などの遺物が出土し、古墳時代の住居跡が確認されている。また、平成11年の調査では沢目遺跡においても古墳時代初頭の住居跡が 7 基確認され、布留式土器をまねて作られたものと思われる土師器が出土している。

下堀遺跡では、地下式横穴墓が 7 基検出され、この中には墳丘状の盛り土と思われる痕跡も確認されている。

中世では、大崎城、胡摩ヶ崎城、野卸城、龍相城（神領遺跡群内）、金丸城、天守城、梶谷城、遠見ヶ丘などの山城跡がある。

金丸城跡は、大隅中央農道建設に伴い平成10年から平成12年にかけて調査が行われた。『大崎町中世の城跡』によれば、落城は1359年であることから、鎌倉時代に存続していたものと推定している。しかし、発掘調査における中世の出土遺物の多くは、14世紀半ばから15世紀のものと思われる青磁・白磁・染付である。したがって、これらは金丸城落城以降のものであり、調査区内の遺構・遺物については直接金丸城に結びつくものではなかった。なお、金丸城跡以外では、文献や地形、

集落の名称、石碑、五輪塔などの配置等で城の所在などを推測した資料があるが、発掘調査はなされていない。

『大崎町 中世の城跡』で掲載されているもの以外では、炉山城、松尾城、梶井城、天ヶ城があり、所在の推測がなされているが、実態は明らかにされていない。

近世では、平成12年の金丸城跡の調査で中世から近世の遺構・遺物が発見されたが、主に17世紀前半を中心とする遺物が多く出土した。出土遺物として染付、唐津焼、古伊万里焼、瓦器のほか中国製陶磁器が出土した。遺構としては、おびただしい数の柱穴（1間×2間 4棟、2間×2間 2棟、2間×3間 1棟）水溜土坑（大型6基、小型2基）、炉跡16基、溝状遺構が確認された。

炉跡についてはいずれも意図的に壊され、炉の周辺に炉壁を構成していたと思われる軽石や熱変粘土片が集中して出土している箇所も確認された。その箇所に、陶磁器類のほか碗型鉄滓が出土していたことから、この炉については鉄生産に関連する可能性も考えられる。

◆参考文献◆

- 大崎町教育委員会 1984 「文化財要覧 大崎町」
“ 1988 「大崎町 中世の城跡」 文化財研究誌第6集
“ 1988 「神領地下式横穴群5号」 大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（1）
“ 1992 「神領地下式横穴群6号」 大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（2）
“ 2001 「立山B遺跡」大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（3）
- 救仁郷断二 1951 「大崎町史」
- 中村耕治他 1989 「大隅地方の古墳調査一墳丘測量を中心として一曾於郡大崎町、横瀬古墳」
鹿児島考古第23号
- 池畑 耕一 1987 「南九州における横瀬古墳の特殊性」黎明館調査研究報告第1集

番 号	遺 跡 名	所 在 地	地 形	時 代	遺 物 等	備 考
1	堂園堀	大崎町井俣	台 地	弥生・古墳	土器片	
2	宮脇	大崎町井俣	台 地	古墳・古代	土師器	
3	坂上	大崎町井俣	台 地	弥生・古墳	土器片	
4	柿木	大崎町井俣	台 地	弥生・古墳	土器片	
5	田中古墳群 1 号	大崎町神領697	台 地	古墳	円墳	直径5.8m 高1.1m
	田中古墳群 2 号	大崎町井俣1344-4	台 地	古墳	円墳	直径7.5m 高1.5m
	田中古墳群 3 号	大崎町井俣1358	台 地	古墳	円墳	直径5.4m 高1.3m
6	飯隈遺跡群	大崎町神領飯隈	台 地	弥生・古墳	円墳	
	稲荷堀	大崎町飯隈稲荷堀				
	飯隈古墳群 1 号	大崎町飯隈杉堀		古墳	円墳	直径12.0m 高1.3m
	飯隈古墳群 2 号	大崎町飯隈杉堀		古墳	円墳	直径18.0m 高1.2m
	飯隈古墳群 3 号	大崎町飯隈杉堀		古墳	円墳	直径3.5m 高1.3m
	飯隈古墳群 4 号	大崎町飯隈杉堀		古墳	円墳	直径8.0m 高1.4m
	飯隈古墳群 5 号	大崎町飯隈杉堀		古墳	円墳	直径12.0m 高1.4m
	飯隈古墳群 6 号	大崎町飯隈稲荷堀		古墳	円墳	直径3.0m 高1.5m
	飯隈古墳群 7 号	大崎町飯隈稲荷堀		古墳	円墳	直径6.0m 高1.5m
	飯隈古墳群 8 号	大崎町飯隈稲荷堀		古墳		
	飯隈古墳群 9 号	大崎町飯隈杉堀		古墳	円墳	直径6.0m 高1.0m
7	高尾	大崎町菱田	台 地	縄文後期	市来式土器	
8	大園・浜牧・池	大崎町益丸・神領	台 地	古墳・古代		
9	沢目	大崎町益丸沢目	砂 丘	縄文～古墳		H11発掘調査
10	八島ヶ迫	大崎町神領八島ヶ迫		弥生・古代		
11	神領遺跡群					
	天子ノ前	大崎町横瀬龍相		弥生	壺棺破片	
	天子丘	大崎町横瀬天子丘		弥生	土器片	
	龍相	大崎町横瀬龍相		弥生	土器片	
	天子ノ前土坑	大崎町天子ノ前		古墳	仿製鏡 貝輪 直刀 人骨	
	神領古墳群 1 号	大崎町神領27		古墳	円墳	直径12.0m 高2.3m
	神領古墳群 2 号	大崎町神領34		古墳	円墳	直径12.0m 高2.3m
	神領古墳群 3 号	大崎町神領40		古墳	円墳	直径12.0m 高2.3m
	神領古墳群 4 号	大崎町神領		古墳	円墳	直径12.0m 高1.1m
	神領古墳群 5 号	大崎町神領		古墳	円墳	直径9.0m 高1.0m
	神領古墳群 6 号	大崎町神領		古墳	前方後円墳 鉄剣 鉄刀 鏡	長さ43m 高2～3m 前方部幅16.0m 後円部径19.0m
	天子丘古墳	大崎町神領		古墳	円墳	
	神領古墳群 7 号	大崎町神領		古墳	円墳	直径10.0m 高1.0m
	神領古墳群 8 号	大崎町神領		古墳	円墳	直径5.0m 高1.0m
	神領古墳群 9 号	大崎町神領		古墳	円墳	直径5.0m 高1.0m
	神領古墳群10号	大崎町横瀬龍相		古墳	前方後円墳	前方部幅5.0m 後円部径14.0m 高4m 長さ26m
	神領古墳群11号	大崎町横瀬龍相		古墳	円墳	
	神領古墳群12号	大崎町横瀬龍相		古墳	円墳	
	神領古墳群13号	大崎町横瀬龍相		古墳	円墳	直径5.0m 高1.4m
	神領古墳群 天子丘土坑14号	大崎町横瀬龍相		古墳		
	神領地下式横穴 1 号	大崎町神領		古墳	鉄剣 1 骨製簪 1 イモガイ貝釧 2 内行花文鏡 1	
	神領地下式横穴 2 号	大崎町神領		古墳		
	神領地下式横穴 3 号	大崎町神領		古墳		
	神領地下式横穴 4 号	大崎町神領		古墳		
	神領地下式横穴 5 号	大崎町横瀬龍相		古墳	イモガイ貝釧	
	神領地下式横穴 6 号	大崎町横瀬龍相		古墳		
	神領地下式横穴 7 号	大崎町横瀬		古墳		
12	美堂B	大崎町仮宿	台 地	古墳		
13	胡摩ヶ崎城跡	大崎町仮宿776-1	台 地	室町		
14	大崎城跡	大崎町仮宿922	台 地	室町		
15	梶谷城跡	大崎町永吉2528	台 地	鎌倉		
16	桜迫	大崎町永吉桜迫	台 地	縄文～古墳		
17	堂地迫	大崎町永吉堂地迫	台 地	古墳・中世		
18	鷲塚古墳	大崎町永吉8894-3	台 地	古墳	地下式横穴	町指定文化財
19	大塚	大崎町横瀬	台 地	弥生・歴史		
20	浜田	大崎町横瀬浜田	台 地	古墳		
21	横瀬古墳	大崎町横瀬エサイ町	海 岸 野 野	古墳	前方後円墳 全長160m	国指定史跡
22	倉元	大崎町野方倉元	台 地			
23	栗之峰	大崎町横瀬栗之峰	台 地	弥生		
24	後迫	大崎町横瀬後迫	扇状地	縄文～近世		本報告書
25	下原	大崎町神領下原		弥生～		

第1表 周辺遺跡地名表



第1図 周辺遺跡地図

第Ⅲ章 調査の概要

第1節 発掘調査の概要

発掘調査は、建設予定か所の中央線北東部を基準とした。西からA～C，北から1～16の1辺20mのグリッドを設定した。その後、砂丘部上に当たるB－4・5区，砂丘部が終わり平坦部となるB－10・11・13・15区に先行トレンチを設定して調査を開始した。

先行トレンチでの確認調査の結果，B－4・5区のトレンチには遺物包含層は認められず，B－9区以北の砂丘部は本調査の対象外であると判断した。B－10～15区からは，土師器などの遺物が出土したために，本調査の対象とした。その範囲は1,315㎡である。

第2節 層位

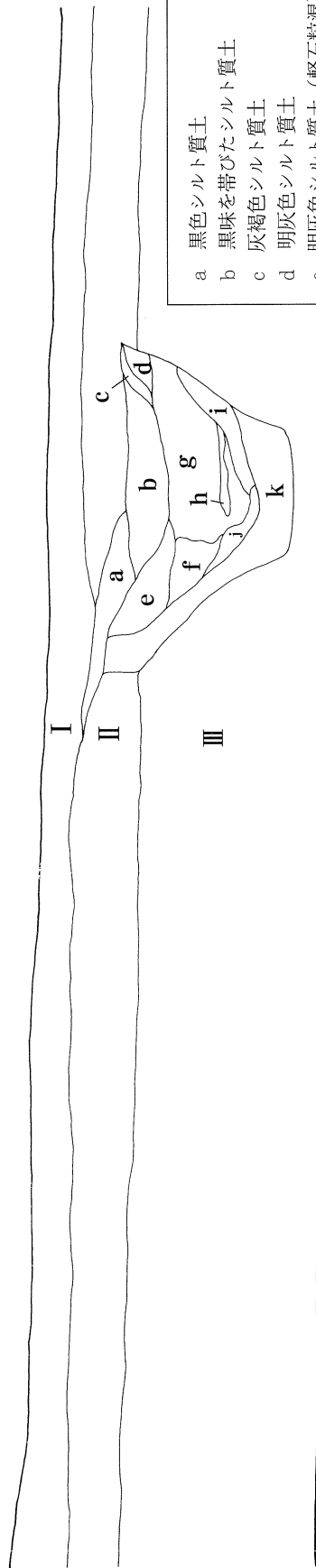
土層は，各調査区とも概ね同様の堆積状況であった。現在の耕作土を含む表層の下に，縄文時代から近世までの遺物が混在しているやや砂質の黒色土がある。これをⅡ層とした。この下位に，白色砂層が厚く堆積している。この層中からは，遺物の出土はほとんど見られなかった。

第3節 整理作業の経過

整理作業は，平成15年度に県立埋蔵文化財センターで実施した。水洗い・注記などの基礎作業終了後に，接合・分類作業を実施し，実測遺物の選別をおこなった。その後，実測・トレースを整理作業員の協力のもと担当者と分担し，レイアウト終了後に遺物の写真撮影を実施した。

B-14区

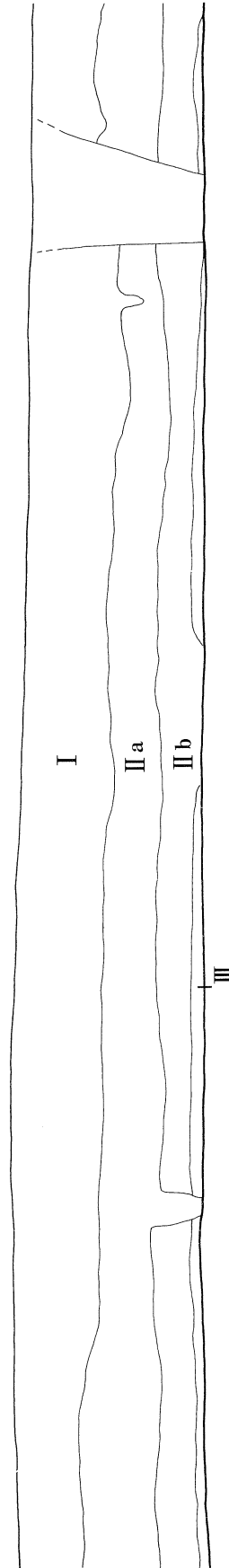
L = 8.8m



- a 黒色シルト質土
- b 黒味を帯びたシルト質土
- c 灰褐色シルト質土
- d 明灰色シルト質土
- e 明灰色シルト質土 (軽石粒混)
- f 黒色砂
- g 灰褐色砂
- h 黄色砂
- i 橙色砂
- j 黒色砂
- k 黒色砂 (シマ状)

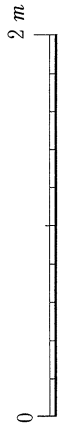
L = 8.8m

B-11区



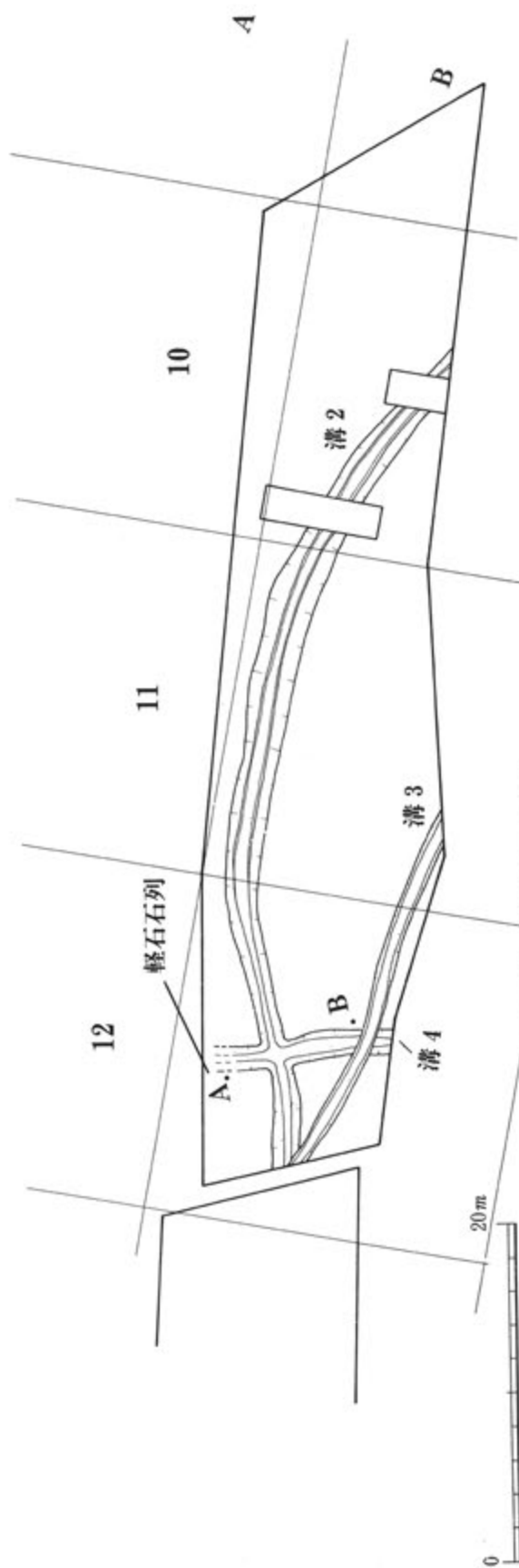
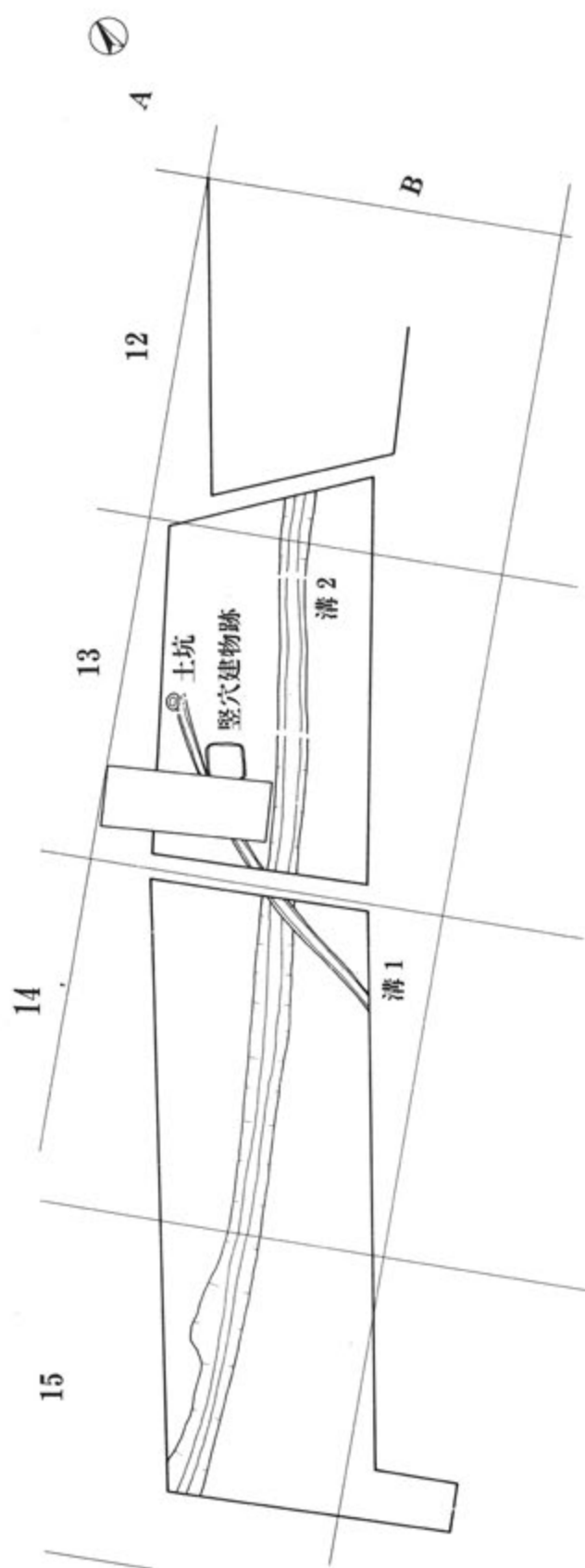
- I 表土
- II a 黒色砂やや軟質
- b " やや硬質
- III 白色砂

第2図 土層断面図





第3図 グリッド配置図



第4図 遺構配置図

第Ⅳ章 調査の成果

第1節 遺構

1 竪穴建物跡

竪穴建物跡は、B-13区Ⅲ層で検出されたもので、2 m×2 mの正方形で30～50cmの深さがある。内部では、人頭大の軽石が多量に出土したが、時期判断に耐えうる遺物は極めて少ない。遺構検出面はⅢ層上面で、遺構内の埋土はⅡ層の黒色砂である。1は、遺構内一括で取り上げたもので、高台を有する土師器碗である。

2 土坑

B-13区で検出された。長径110cm、短径85cmの楕円形を呈する。深さは50cmを測る。遺構検出面はⅢ層上面で、遺構内埋土はⅡ層の黒色砂であった。時期判断に耐えうる遺物は出土していない。

3 軽石石列

軽石石列は、B-12区Ⅱ層上面で人頭大の軽石を一列に並べた状態で検出された。延長は8.2mある。遺物等は共伴しておらず、時期は不明である。

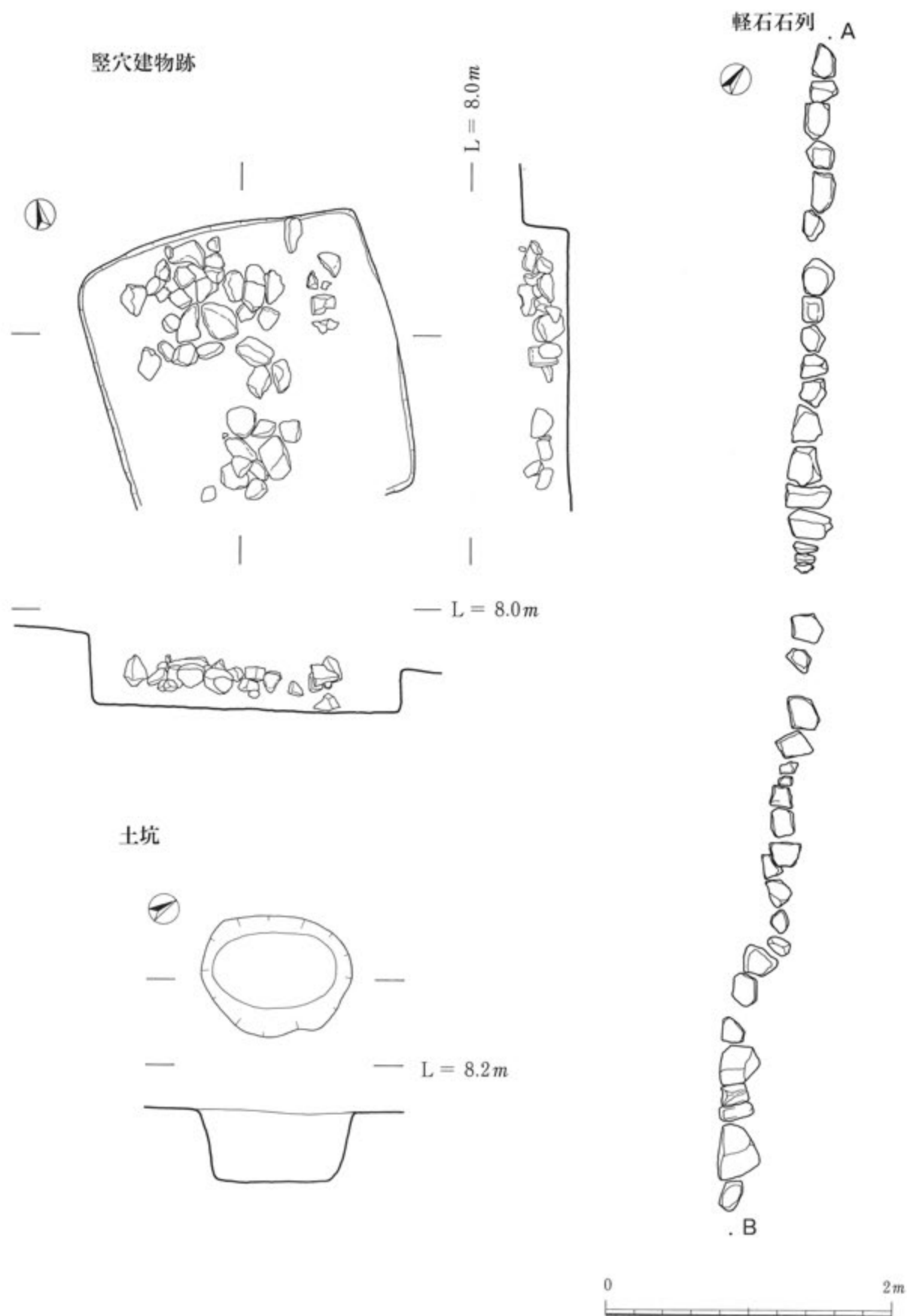
4 溝状遺構

B-10～15区にかけてⅢ層上面で4条が検出された。

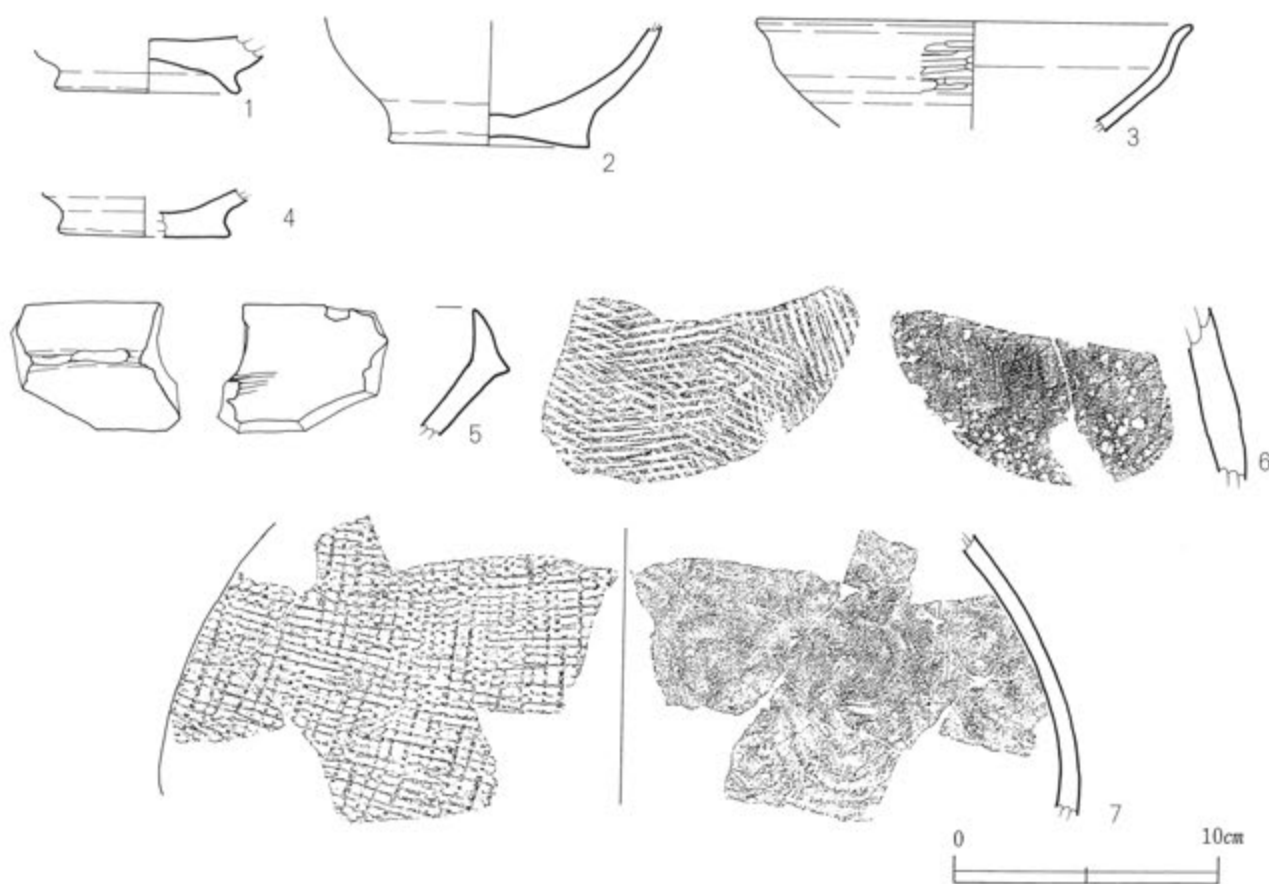
溝1は、幅70cm前後で、深さは検出面から15cm前後である。延長21mを測る。溝2は、幅1.3～1.5m、深さは検出面から60～110cm前後である。延長は108mある。溝3は、幅1m前後、深さは18cm前後である。延長は20mある。溝4は、幅1.5m前後、深さは45cm前後である。延長は10mある。

これらの溝状遺構は、検出面での切り合い関係から2・4が古く1・3が新しいという関係が考えられる。

2は断面形がハ字状を呈する高台を持つ碗である。3は黒色土器である。碗の口縁部で、中世に入る可能性もある。外面にヘラミガキが施されるものである。内面は風化しているためヘラミガキは観察できないが、本来は施されていたことが想定される。4は、柱状（充実）の高台付き碗の底部である。5は、中世の備前焼播鉢である。横方向の櫛目が見られる。片口部分と思われる。7は外面に格子タタキ痕、内面に同心円文当て具痕が見られる。6は、中世の須恵器と思われ、外面に綾杉状の平行タタキ痕が見られるものである。内面には当て具痕は見られない。



第5図 遺構実測図



第6図 遺構内出土遺物

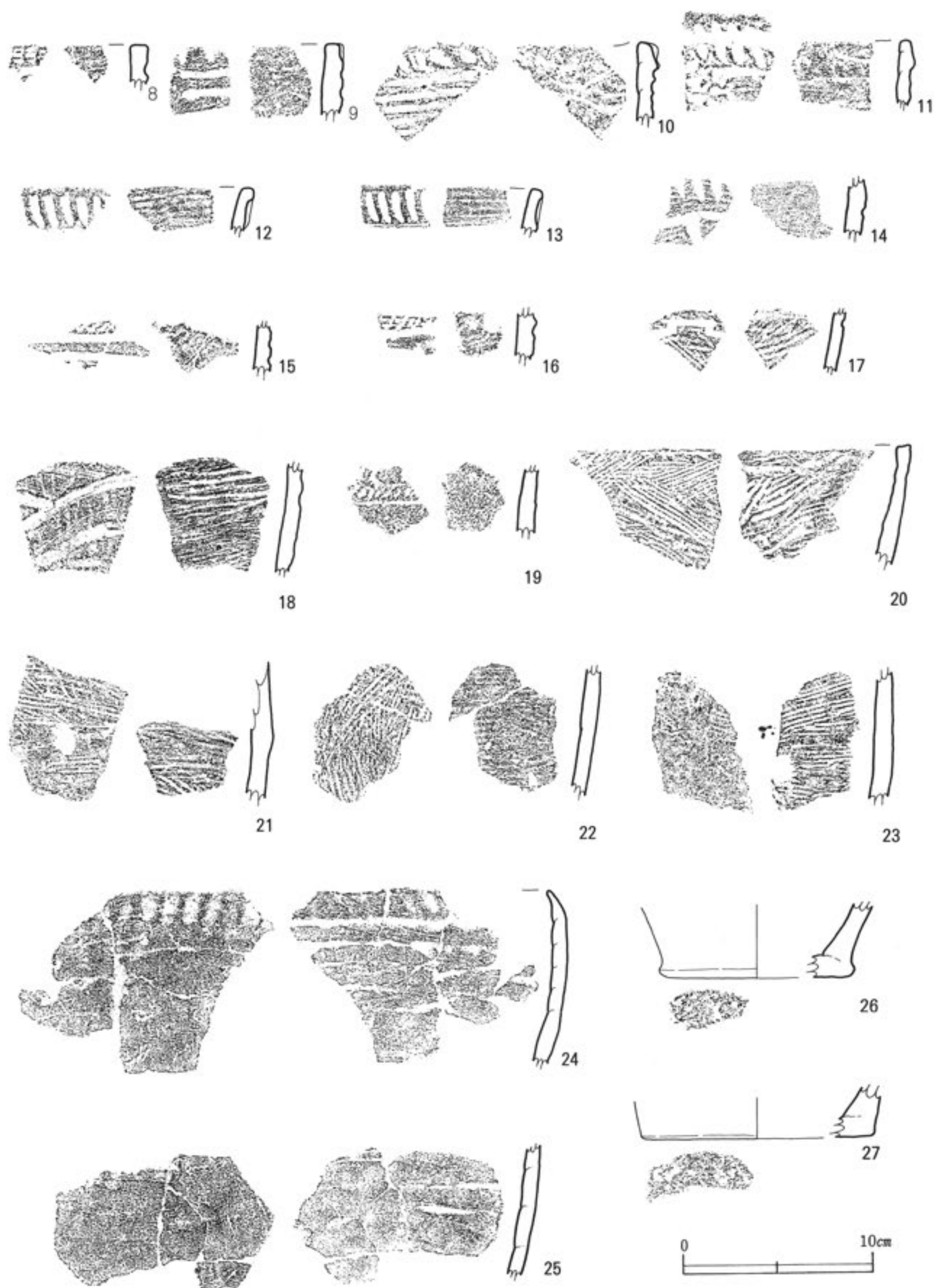
第2節 包含層の遺物

1 縄文時代の土器

縄文時代の土器は、調査区内にわずかに散在している状況であった。これらの中から、口縁部片などの特徴的な資料20点を図化し掲載した。

8は、平坦な口唇部を呈し、口縁部には縦位の貝殻刺突文が施されている。この下位には沈線が施されているが、小破片のために1条か多条かはっきりとしない。9～11は口縁端部に刺突文を施すものである。11はその下位に横位の沈線文が施されている。10・11は横位の貝殻と思われる工具による条痕文が施されている。断面には、粘土紐の接合痕が観察できる。12・13は口縁部に縦位の短い沈線が連続して施されている。胴部に関しては不明で、内面は横位の貝殻条痕による器面調整が施され、この後にナデ調整が施されている。14～19は胴部片である。15・16はいずれも小破片であるが、2本の沈線文間に斜位の貝殻刺突文を施し、いわゆる疑似縄文を意識したものであると思われる。20～23は内外面共に貝殻条痕文を施しているものである。20は口縁部片である。口唇部は平坦で直行する口縁部を呈する。内外面に施される貝殻条痕文は不規則である。24・25は無文土器で、同一個体と思われる。両者共内面に明瞭な粘土接合痕を残す。この粘土は紐状を呈し、1本あたり1～2cmの厚さのものが連続して積み上げられている。24は口縁部片で、おそらく上部からの指圧で摘むようにして調整を行い内傾させている。26・27は底部片である。26はわずかに張り出している。

これらの資料は、縄文時代後期から晩期のものであると思われる。



第7図 縄文時代の遺物

2 弥生時代の土器

弥生土器は甕形土器と壺形土器がある。

(1) 甕形土器

甕形土器は形態から4種類に分かれる。

1類は口縁部が逆L字状となるもので、上面はほぼ平坦となり、口唇部は浅いくぼみとなる(28)。口縁部は直に立ちあがる胴部に板状の帯が貼り付けられる。口縁直径は約25cmで、胴部はやや外へ広がるもののほとんど直になっている。上面は横方向のハケナデ、外面は横方向のヘラナデで仕上げ、内面は指頭状の押圧痕の上を横方向のヘラナデで仕上げている。焼成度は普通で、内外とも茶褐色を呈している。茶色石・白色石も含むが、金雲母の多い胎土である。

2類の口縁部は丸みをおびて、内側がやや下がった逆L字形を呈するもので、上面はほぼ平坦となる(29)。口唇部は丸みをおび、浅いくぼみとなる。胴部へやや開く。内外、上面とも横方向のヘラナデで仕上げている。焼成度は良く、内外ともにぶい橙色を呈する。白色石・石英・金雲母などこまかい石粒を含む胎土である。

脚台は浅いあげ底となるが充実しており高い(32)。脚台端は段となり、直径6cmである。内外とも摩滅しており、内側は縦方向のヘラナデである。焼成度は普通で、内外ともにぶい黄橙色を呈している。黄白色石・石英・茶色石・金雲母の多い砂質土であるが、特に金雲母が多い。

3類の口縁部は内側が下がる逆L字状のもので、端部は丸みを帯びるが下は稜をもつ(30)。横方向のていねいなヘラナデで仕上げている。焼成度は良好で、内外ともにぶい褐色を呈する。白色石などこまかい石を含んだ胎土だが、金雲母が多い。

4類は口縁部が細長いもので、端部は矩形を呈する(31)。内外とも横方向のていねいなヘラナデで仕上げ、にぶい黄橙色を呈する。焼成度は良く、こまかい胎土である。

(2) 壺形土器

口縁端部が下がる逆L字状口縁のもの(33～37)である。丸みをおびた部厚い作りである。口唇部にはヘラ凹線がみられる。端部に带状粘土を貼り付ける作りで、上面は丸みをおびているが、下面にはくぼみや段がみられる。肩部には三条ほどの三角突帯が貼り付けられる。調整はいずれもヘラによるていねいな横ナデである。焼成度は34と35は普通であるが、他は良好で堅い。色調はにぶい褐色・黄褐色あるいは明赤褐色を呈している。金雲母・黄白色石・茶白色石・石英・角閃石などのこまかい土を用いている。

(3) まとめ

これらの土器は口縁形態などから中期後葉を主体としているが、中期中葉や後期初頭のものも含まれている。

3 古墳時代の土器

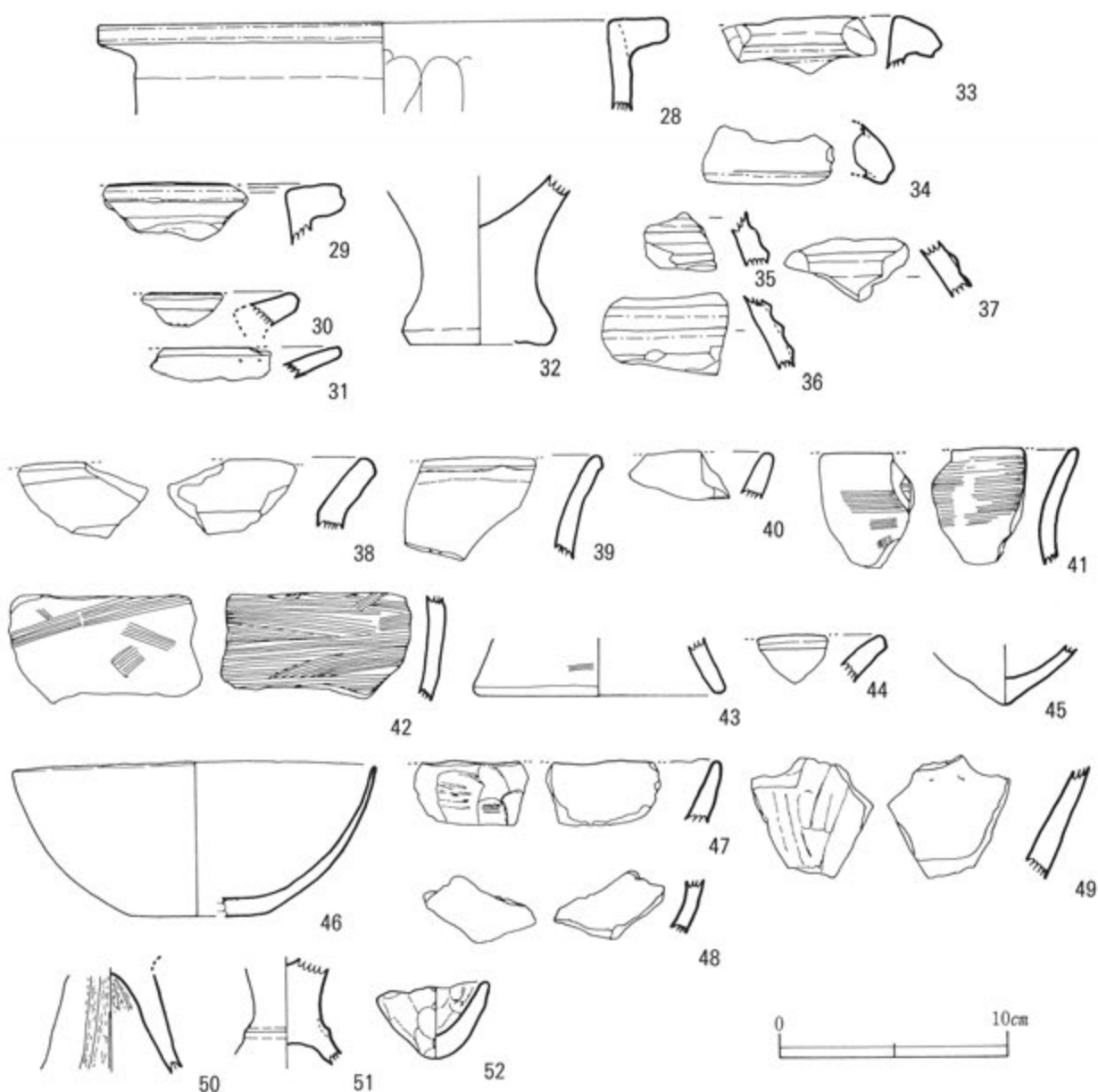
古墳時代の土器には甕形土器・壺形土器・埴形土器・鉢形土器・高坏形土器・手づくね土器がある。

(1) 甕形土器

くの字状に外反する口縁部に、脚台が付く器形である。口縁部(38～41)は丸みをおびているが、屈曲度が強くて内面に稜をもつものとゆるやかに曲がるものがある。前者は部厚く、後者はうす

い。器面調整は41が内外とも横方向のハケナデで、その他は横方向のヘラナデである。41の内面は下部が縦方向となる。焼成度は39と41は軟質であるが、38と40は強く焼けている。色調は39と41が内外面ともにふい黄橙色、38の外表面が黒褐色、内面がにふい褐色、40の外表面が灰褐色、内表面が黒褐色である。38は外表面にススが付着している。38は石英・茶色石など3mm大の石を多く含む粗い土を用い、他は金雲母・茶色石・石英・白色石・黄白色石などのこまかい土を用いている。

脚台（43）は裾の直径が11cmで、端部は丸みをおびている。外面は横方向のヘラナデ、内面はヘラナデで仕上げている。内外面とも黄色っぽい淡茶褐色を呈し、白色石・石英・長石・雲母などを含むこまかい土を用いている。焼成度は普通である。42は薄い作りの胴部で、内外面ともていねいな横方向のハケナデで仕上げている。焼成度は良好で、外表面にススが付着している。灰褐色を呈している。



第8図 弥生・古墳時代の遺物

(2) 壺形土器

外へ広がる口縁部で、断面形は矩形を呈している(44)。口唇部に細い沈線がある。淡茶褐色を呈し、焼成度良好である。石英・白色石の多いこまかい土を用いている。

(3) 罌形土器

尖がり底となる薄い作りの罌形土器(45)で、外面はミガキに近い縦方向のヘラナデでツルツルした感じである。内面は丁寧なヘラナデで仕上げている。褐色を地色とし、内面は明るく、外面は光沢のある暗い感じとなる。こまかい胎土である。

(4) 鉢形土器

3種ある。

46と47は口縁が丸みをおびたもので、安定した平底となる。46は口縁部直径が16cm、高さ7cm、底部直径が6cmである。46は内外面共にミガキに近い丁寧なヘラナデで、47は、内外ともヘラナデであるが、外は粗い縦ナデ、内はていねいな横ナデである。共に5mm大のものも含む白色石・茶色石・長石などの土を用い、焼成度は普通である。色調はにぶい橙色あるいは淡茶褐色であるが、47の内面はやや黄みがかっている。46は表面の剥脱が見られるが、丹塗りが施されている。

48は丸みをおびた器形で内外ともていねいなナデ調整で、外はミガキに近い。茶色石・石英などの小石を含むこまかい土を用いている。焼成度は良く堅く、にぶい黄褐色を呈しているが、外にはススが付着している。

49はやや大型の鉢形土器で、外側はヘラミガキ、内側はていねいなヘラナデで仕上げる。石英・白色石の多いこまかい土を用いており、焼成度は良く堅い。内面は灰茶褐色、外面は光沢のある黒褐色で、部分的に赤茶褐色を呈している。

(5) 高坏形土器

高坏形土器の短脚の筒部が2点ある(50・51)。51は筒下部に一条の三角状突帯が貼り付けられている。50は外へゆるやかに広がって裾部へ至る。外面はヘラによるていねいな縦ナデ、内面はヘラによる横ナデである。ともににぶい褐色を呈し、焼成度は51が良好で、50は普通である。51は黄白色石・金雲母を含むこまかい土、50は茶色石の多い胎土である。

(6) 手づくね土器

口縁直径5cm、高さ3.5cmの丸底の鉢形をした手づくね土器である(52)。白色石・石英のこまかい土を用いているが、5mm大の大きな石粒もある。外面は黄褐色と黒褐色、内面は黄褐色を呈している。

(7) まとめ

これらの土器は前期のものを主体としているが、38のように弥生時代終末期のものも含まれている。

4 古代・中世の遺物

古代と中世の遺物については明瞭な時期区分が行い難いものを含むため、古代・中世として以下にまとめた。なお、反転復元して作図したものがほとんどであるので、口径・底径についてはある程度の誤差を含んでいる可能性がある。

(1) 土師器

碗・坏・小皿・黒色土器碗・甕がみられる。ここではそのうち64点について掲載した。

53～66は土師器碗・坏である。これらは古代に属する遺物である。53・61～64は高台付きの碗である。54・55・65・66は坏で底部には回転ヘラ起こしがみられる。56は底部が柱状（充実）高台状を呈するもので体部は碗形を呈する。ただし、底部は完全な柱状高台ではなく、中央部分が若干上げ底状である。つくりは雑である。57～60は碗の口縁部である。

53は高台付きの碗で、口径に対する器高の割合が比較的高いものである。全体的にしていねいな調整が施される。54は口径に対して器高が比較的低く、底部はやや柱状（充実）高台状を呈する。底部は回転ヘラ起こしで、全体的にしていねいなつくりである。55は口径に対する器高の割合が比較的高い坏である。底部は回転ヘラ起こしを行ったのちにナデが施されているが、削り込み高台に類似した溝が底部をめぐる。64は断面形がハの字形を呈する高台を持つ碗である。65・66は底部の回転ヘラ起こし痕が明瞭に観察できる坏であるが、つくりは雑である。

67～74は黒色土器である。67・68は碗の口縁部である。69は坏，70～72は高台付き碗，73は柱状（充実）高台付き碗の底部である。74は高台付き皿の皿部と脚部の境目付近である。これらは基本的に古代のものと思われる。

68は内面にヘラミガキ痕が観察されるものである。反時計回りにミガキを施していることが確認される。

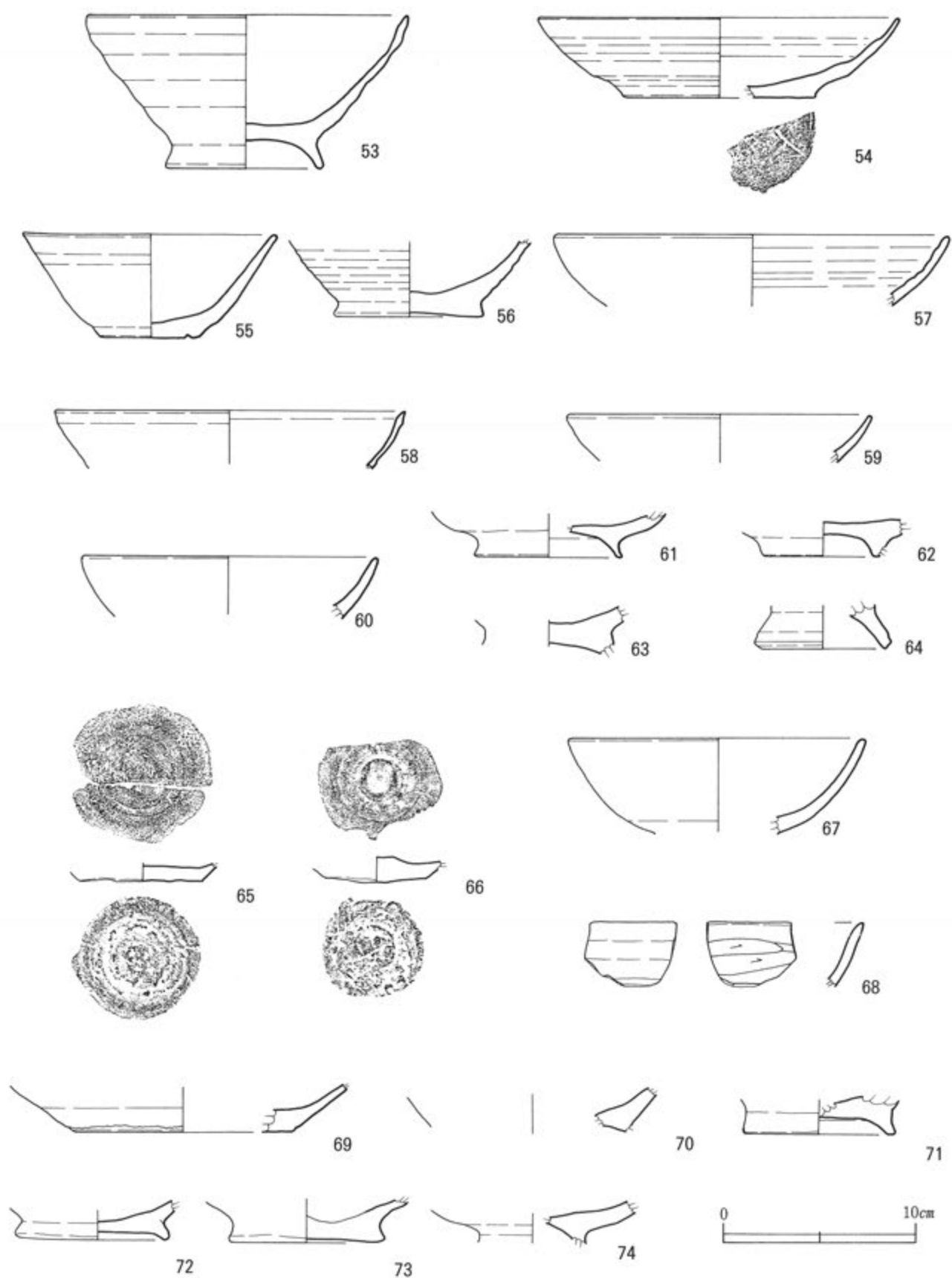
75～114は土師器小皿である。

75～98は回転ヘラ起こしの底部である。75～83は底部の回転ヘラ起こしが明瞭なものである。雑に起こしているもの（75），中央付近まで渦巻き状にヘラが入っているもの（76・79），中央付近までヘラを入れず途中で起こしているもの（80），ヘラ起こしの後にナデを施すもの（81）がある。また，75～78は内面の水引き痕が明瞭なものである。

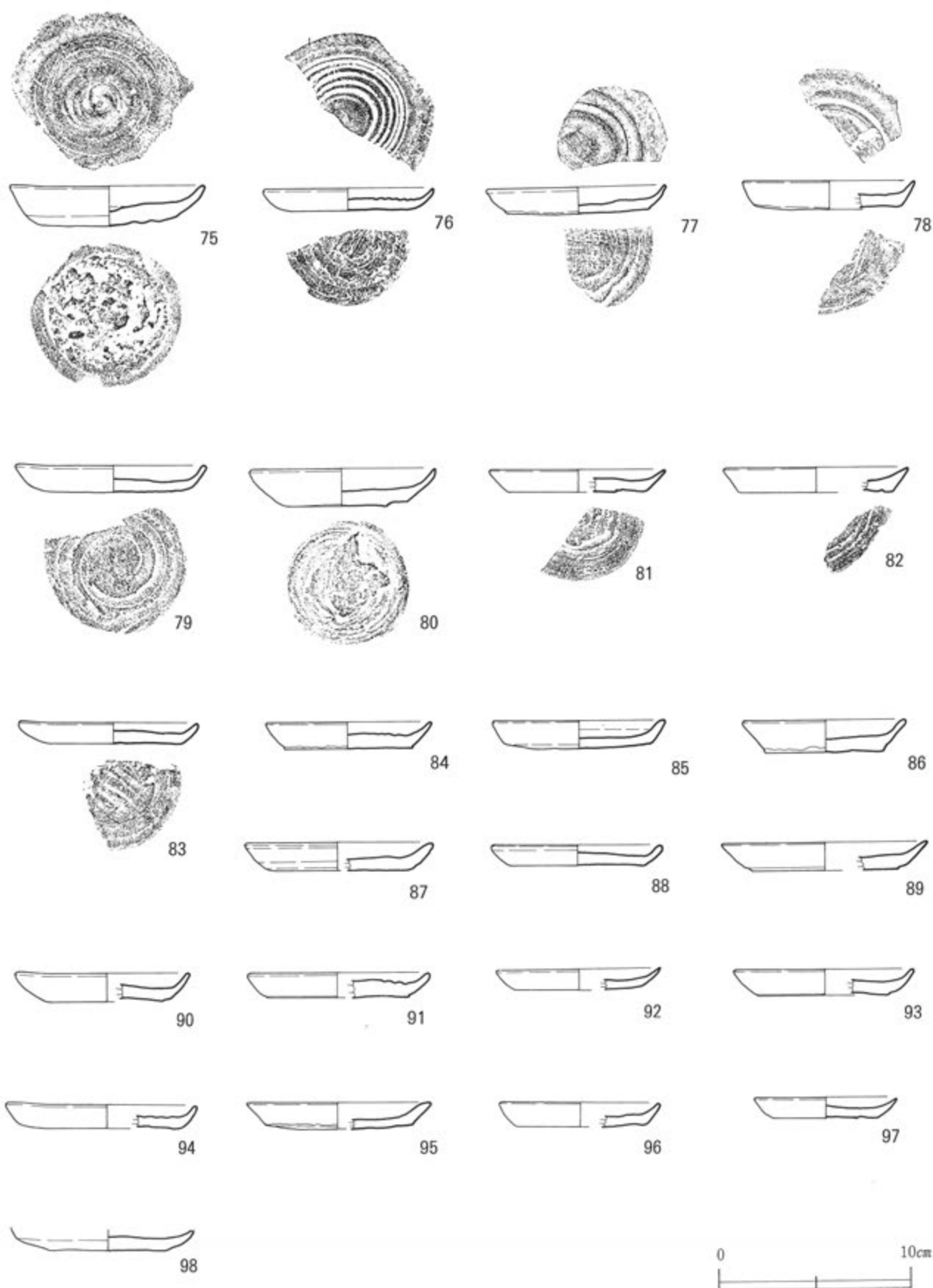
99は底部が糸切りで，かつ粗雑なつくりである。100～104についても底部が糸切りのものである。

105～114は底部の切り離し痕が明瞭に観察できないものを一括した。

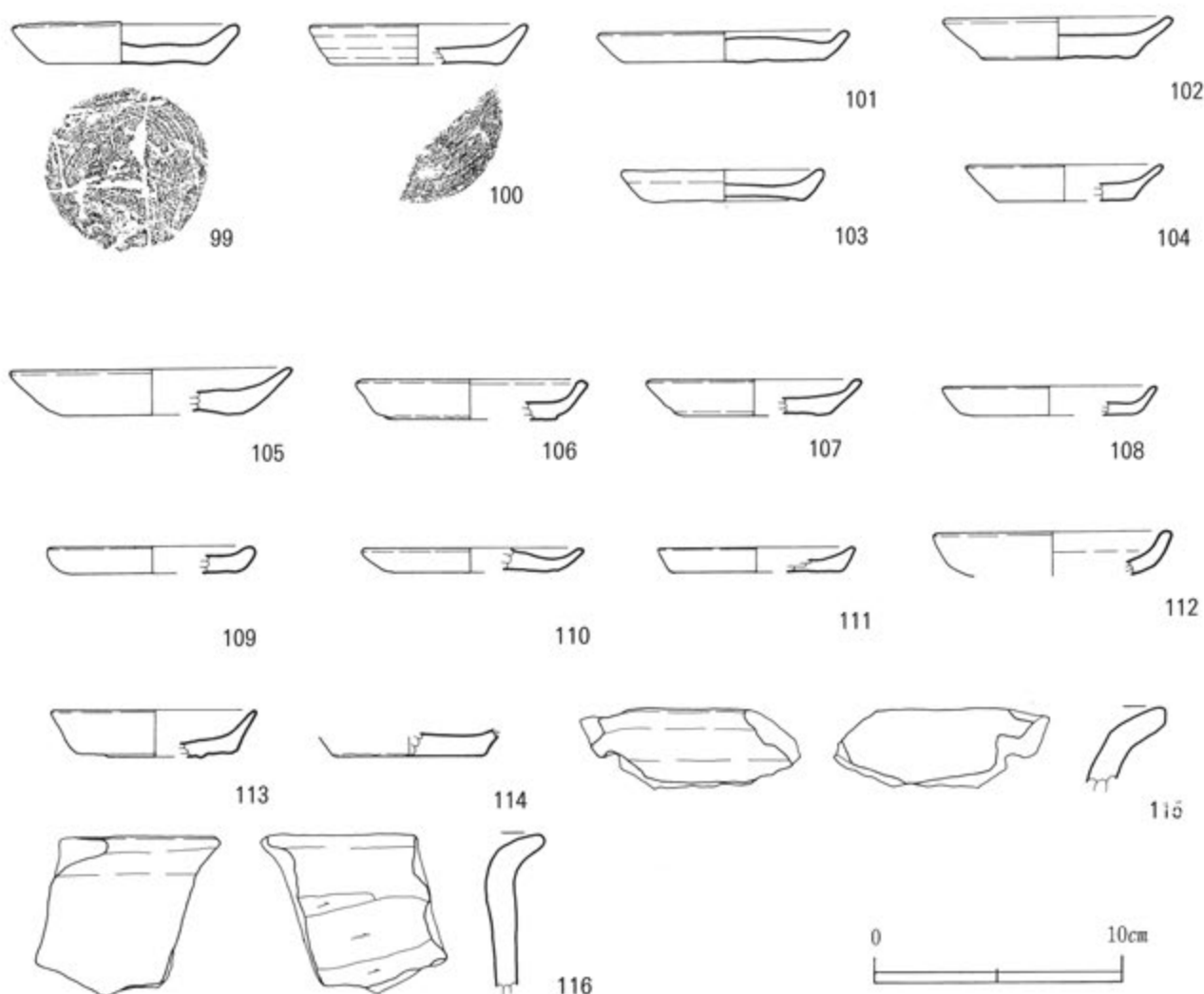
115・116は甕である。いずれも古代のものである。115は口縁部が外反し波状を呈するものである。甕ではなく移動式カマドの一部の可能性もある。116は口縁部が外反し内面にヘラケズリが明瞭にみられるものである。



第9図 古代・中世の遺物（1）



第10図 古代・中世の遺物（2）



第11図 古代・中世の遺物（3）

(2) 須恵器

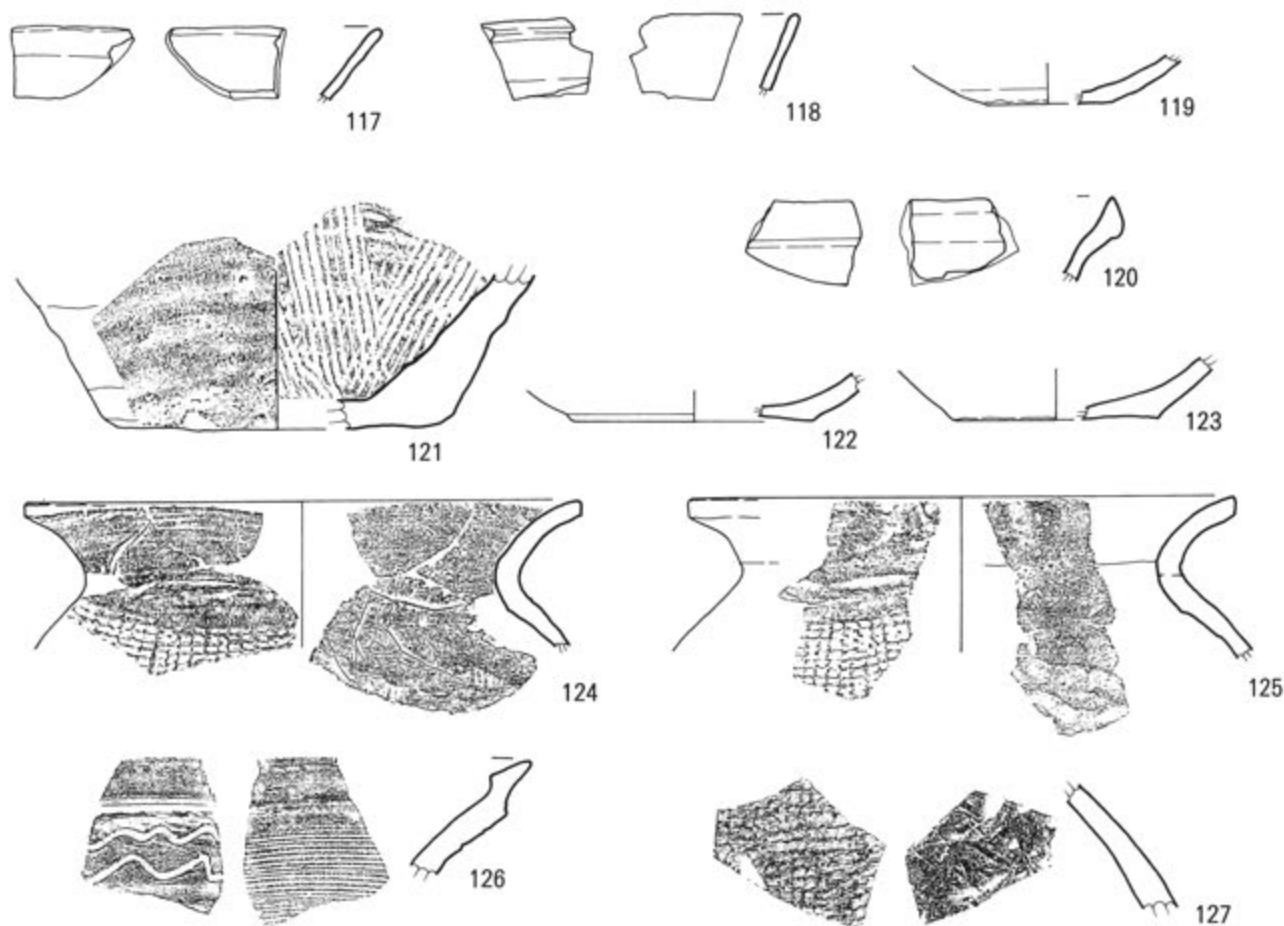
坏・甕・鉢が出土している。ここでは古代の須恵器のほかに中世の備前焼・東播系こね鉢も一括している。そのうち11点について掲載している。

117～119は古代の須恵器坏である。いずれも小破片である。119は底部のへう起こし痕が明瞭に観察されるもので粗雑なつくりである。

120～122は中世の鉢である。121は備前焼のすり鉢で、縦・斜め方向のかき目がみられる。また、120・122は東播系のこね鉢である。

123は中世の瓦質土器であるが、便宜上須恵器に分類した。底部には糸切り痕が残る。

124～127は甕である。124・125は同一個体である可能性があるもので、外面には格子目タタキ痕が、内面の頸部以下には同心円当て具痕がみられる。126は外面にへう描き波状文がみられる口縁部である。127は外面に格子目タタキ痕が、内面には特殊な当て具痕がみられる。



第12図 古代・中世の遺物（4）



(3) 陶磁器

128～140は白磁である。このうち128～133は口縁部が玉縁状を呈し、134・135は口縁部が外反する。また、137～140は口縁部が玉縁状を呈するものに伴う高台付き底部と考えられる。このうち140は高台に透かしを持つ。

136は口縁部が外反する。内面に2条の沈線を持ち、外面には斜方向にヘラによる連続的な施紋によるものとみられる文様がある。類例がみられないものであり検討を要する。

143は青白磁の合子の完形品である。蓋はなく身のみである。体部の下半部以下には釉がかかっていない。

142は天目茶碗である。近世のものである可能性もあるが、ここでは中世として扱った。

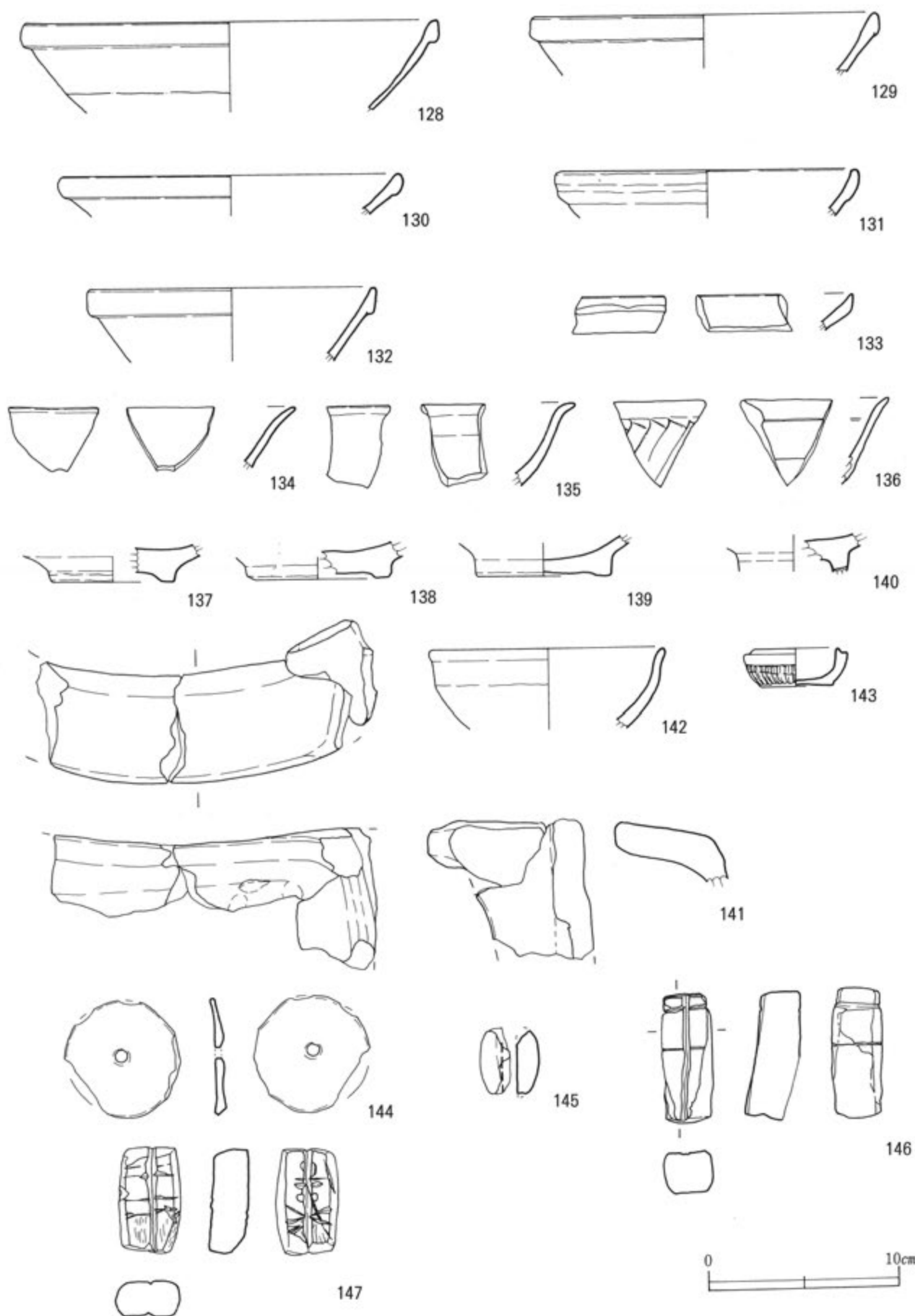
(4) その他

ここでは上記のいずれにも分類されなかったものについてその他として一括した。

141は移動式カマドの口縁部の可能性のある土製品である。県内では、始良町萩原遺跡・溝辺町東免遺跡での出土例が知られているが、その後類例の出土はほとんどなく注目される遺物である。

144は、土師器坏もしくは皿の底部を転用した紡錘車である。転用に当たっては、簡単な調整を施すにとどめている。

145は、土錘形土製品である。紡錘状で幅が太めのものである。上下方向に穿孔が施されている。

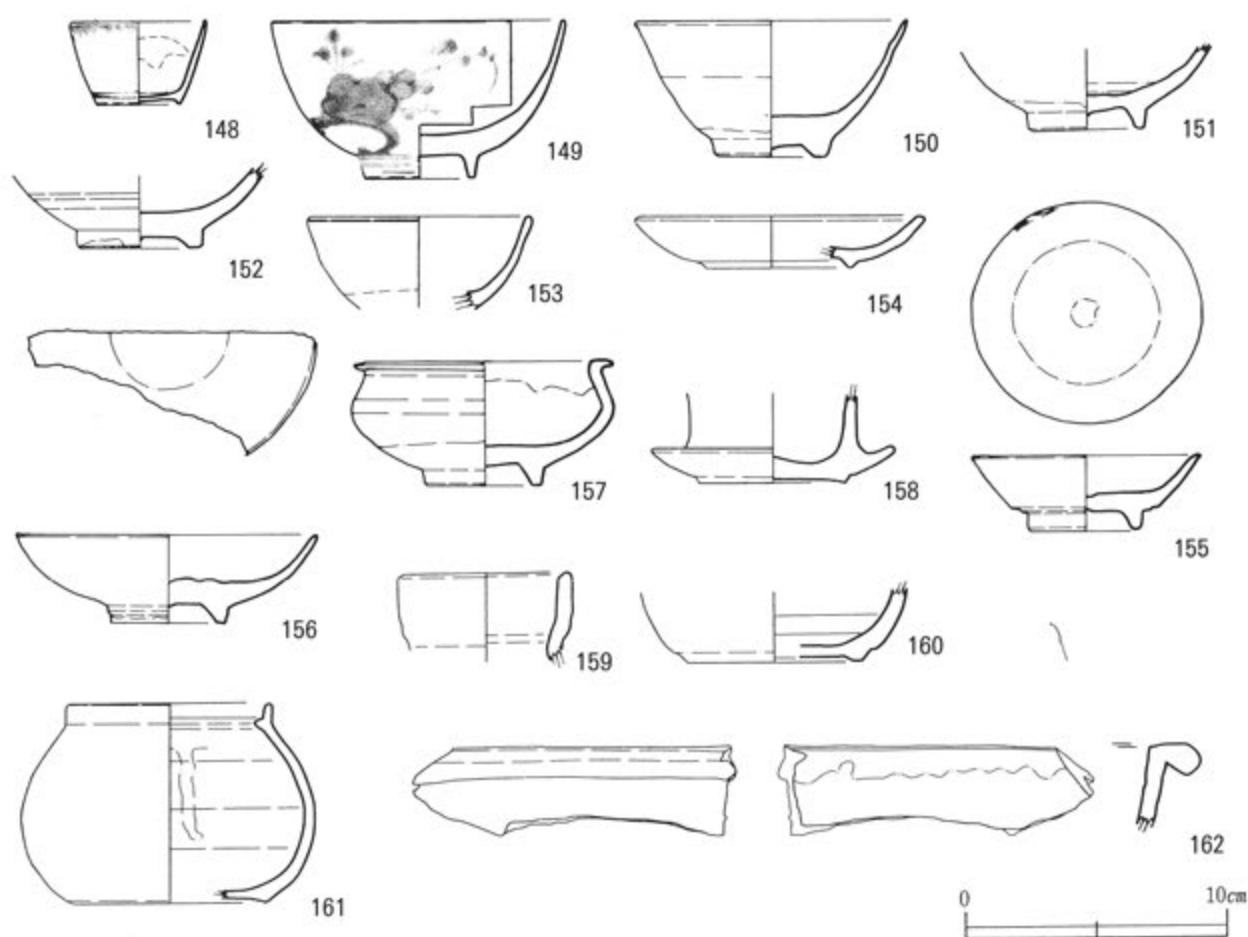


第13図 古代・中世の遺物 (5)

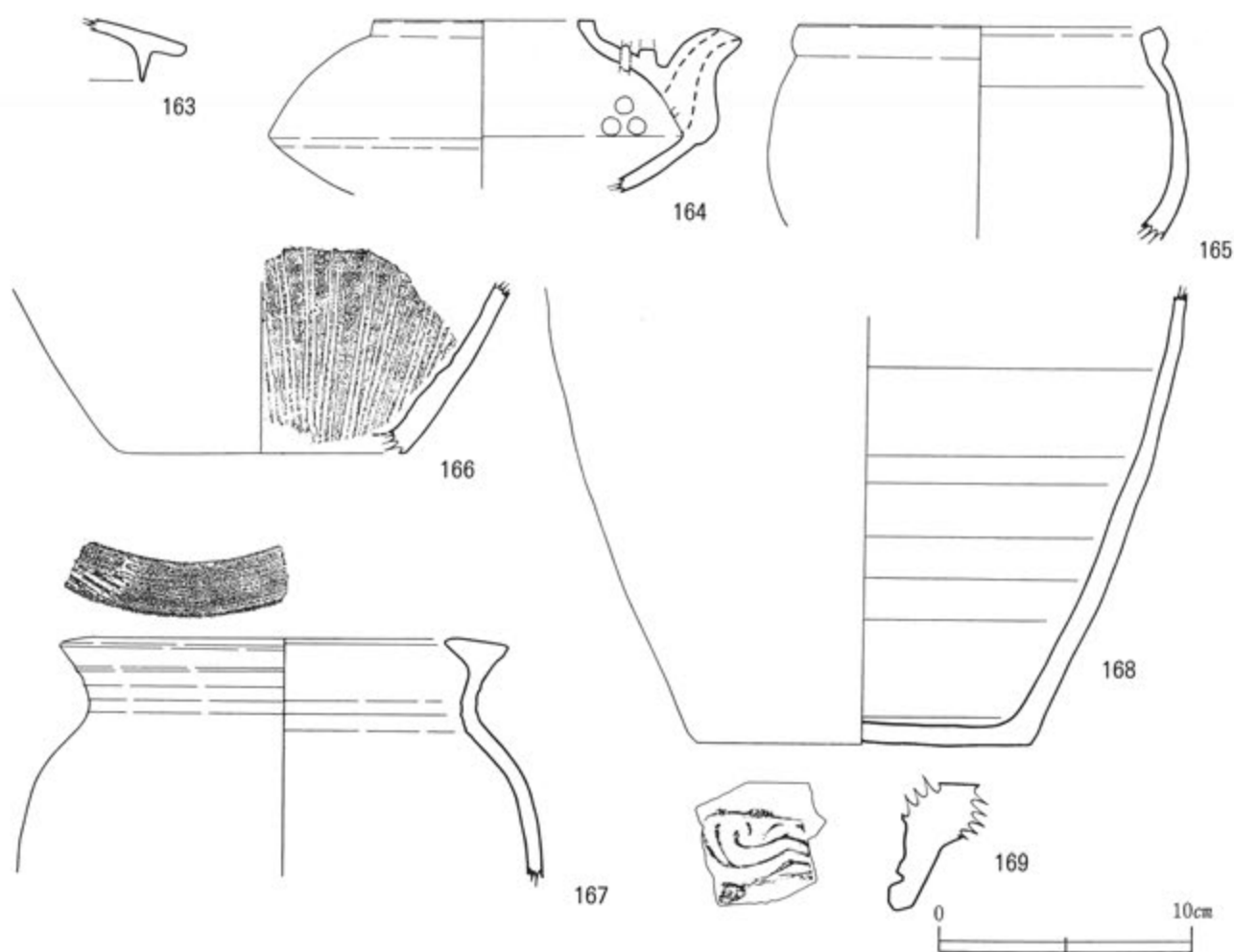
146・147は滑石製の石鍋を転用したとみられるもので、石鍾の可能性はある。いずれも線刻が施されている。何かをかたどったとみることも可能であるが、明瞭でなく検討を要する。

5 近世の遺物

148は小杯である。149～153は碗である。149は口縁直径が11cm、高台直径が4cm、高さが6cmの肥前系の「くらわんか」と呼ばれる丸形の碗である。高台に2条、高台内底部に1条の圈線が見られる。また、外面には梅花文が描かれ、重ね焼きが行われているため見込みは蛇ノ目釉剥ぎされ、畳付も釉剥ぎされている。152は高台直径が4.5cmの龍門司系の碗である。重ね焼きが行われているため見込みには蛇ノ目釉剥ぎが施され、畳付から高台内部にかけても露胎する。153は口縁直径が8.5cmの龍門司焼の碗である。白化粧が内面全体と、外面は体部中位まで掛かり、その上から透明釉が掛けられる。154～156は皿である。157は火入れ鉢と思われる、内面は無釉である。158は灯明皿の受け台と思われる。159・160はいわゆる袋物の破片である。161は、口縁直径が8cm、底の直径が7.5cm、高さが7.5cmの龍門司系の胴部の張る小壺である。外面は鮫肌釉となっていて、口縁部には蓋受け部をつくる。内面、蓋受け部、底部は露胎である。163は、土瓶の蓋の破片と思われる。164は土瓶で、胴部が算盤玉状に強く屈曲する。167は口縁直径が17.5cmの苗代川系の甕である。口縁部は罍縁状を呈し、口唇部には貝目が見られる。



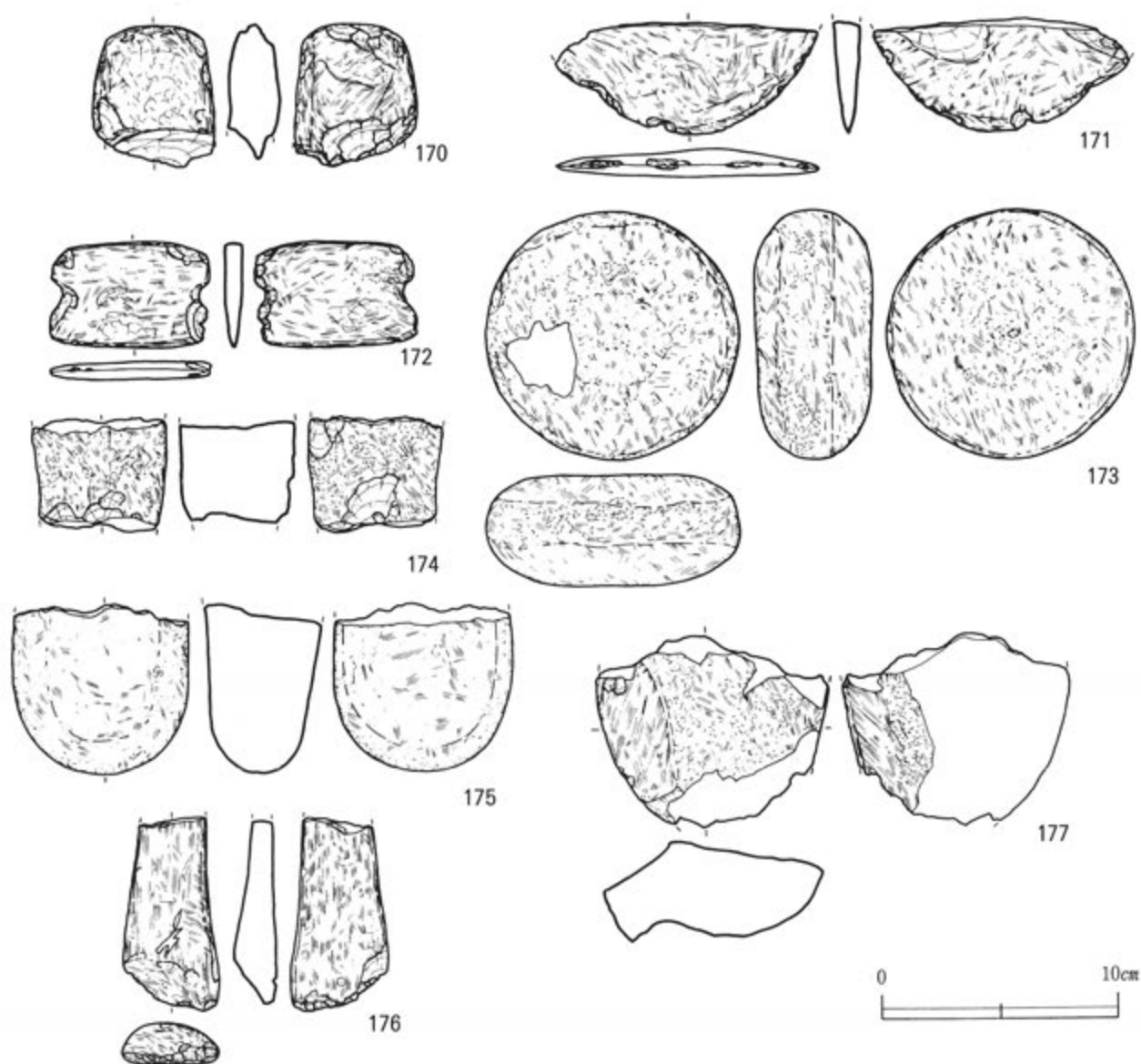
第14図 近世の遺物(1)



第15図 近世の遺物（2）

6 石 器

石器は、包含層中に縄文時代から中世までの土器などが混在している状況から一括して取り扱った。170は頁岩を素材とする磨製石斧で、刃部を欠損しているものである。側面の敲打成形後に擦りを施して仕上げている。171・172は頁岩を素材とした石庖丁である。171の刃部は鋭利な仕上げが入念に施されている。172は両側に抉りが施されている。金属顕微鏡を使用して両者共に使用痕分析を行ったが観察できなかった。173～175は磨石類である。173は安山岩、174は砂岩を用いている。173・174は磨・敲打石で、173は表裏面に凹みが観察できる。175は欠損品で表裏面共に著しい磨りが観察できる。176は表裏面共に磨りが観察できる。裏面に穿孔途中の凹みが観察され、提げ砥石を意識したものである可能性も考えられる。177は不定形の砂岩を用いた砥石と思われる。熱による赤化が認められ、裏面の一部に敲打痕が観察できる。



第16図 石 器

挿図	番号	種 類	形 式 等	器 種	部 位	出 土 区 層	色 調		胎 土					法 量 (cm)			焼 成	備 考
							内 面	外 面	状態	石英	長石	角閃	他	口径	高さ	底径		
6	1	土師器		椀	底 部	B-13	にぶい橙色	にぶい黄褐色									良	竪穴遺構内出土
	2	土師器		椀	胴~底部	B-15	明褐色	にぶい黄褐色									良	溝状遺構内出土
	3	黒色土器		椀	口縁部	B-14	灰黄~黒褐色	にぶい黄橙 ~黒褐色									良	溝状遺構内出土
	4	内黒土師器		椀	底 部	B-14	黒褐色	にぶい黄褐色									良	溝状遺構内出土
	5	中世須恵器	備前系	すり鉢	口縁部	B-14	暗赤褐色	暗赤褐色									良	溝状遺構内出土
	6	中世須恵器		甕	胴 部	B-15	灰褐色	灰褐色									良	溝状遺構内出土
	7	須恵器		甕	胴 部	B-15	暗赤褐色	灰褐色									良	溝状遺構内出土
7	8	縄文土器		深鉢	口縁部		赤茶褐色	赤茶褐色	○				雲母				良	
	9	縄文土器		深鉢	口縁部	B-14	赤黄茶褐色	赤黄茶褐色	○				小礫				良	
	10	縄文土器		深鉢	口縁部		赤茶褐色	赤茶褐色	○								良	
	11	縄文土器		深鉢	口縁部	B-13	赤茶褐色	赤茶褐色	○				砂粒				良	
	12	縄文土器		深鉢	口縁部	B-14	赤茶褐色	赤茶褐色	○								良	
	13	縄文土器		深鉢	口縁部		赤茶褐色	赤茶褐色	○								良	
	14	縄文土器		深鉢	口縁部	B-14	赤茶褐色	赤茶褐色	○				雲母				良	同 一 個 体
	15	縄文土器		深鉢	胴 部	B-14	赤茶褐色	赤茶褐色	○				雲母				良	同 一 個 体
	16	縄文土器		深鉢	胴 部		赤茶褐色	赤茶褐色	○				雲母				良	同 一 個 体
	17	縄文土器		深鉢	胴 部		赤茶褐色	赤茶褐色	○								良	
	18	縄文土器		深鉢	胴 部	B-14	赤茶褐色	赤茶褐色	○								良	
	19	縄文土器		深鉢	胴 部		赤茶褐色	赤茶褐色	○	○			雲母				良	
	20	縄文土器		深鉢	口縁部	B-13	暗赤茶褐色	暗赤茶褐色	○								良	
	21	縄文土器		深鉢	胴 部	B-13	黄茶褐色	黄茶褐色	○				砂粒				良	
	22	縄文土器		深鉢	胴 部	B-14	赤茶褐色	赤茶褐色	○				雲母				良	
	23	縄文土器		深鉢	胴 部		赤茶褐色	赤茶褐色	○				雲母				良	
	24	縄文土器		深鉢	口縁部	B-14	黒茶褐色	赤茶褐色	○				砂粒				良	
	25	縄文土器		深鉢	胴 部	B-14	黒茶褐色	赤茶褐色	○				砂粒				良	
	26	縄文土器		深鉢	底 部		赤茶褐色	赤茶褐色	○				砂粒				良	
	27	縄文土器		深鉢	底 部	B-13	黄茶褐色	黄茶褐色	○				砂粒				良	
8	28	弥生土器	1 類	甕	口縁部		茶褐色	茶褐色					金雲母				普	
	29	弥生土器	2 類	甕	口縁部		にぶい橙色	にぶい橙色	○				金雲母				良	
	30	弥生土器	3 類	甕	口縁部	B-15	にぶい褐色	にぶい褐色					金雲母				良	溝状遺構内出土
	31	弥生土器	4 類	甕	口縁部	B-14	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色									良	
	32	弥生土器	2 類	甕	底部脚台	B-11	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	○				金雲母				良	
	33	弥生土器		壺	口縁部	B-14	にぶい褐色	にぶい褐色				○	金雲母				良	溝状遺構内出土
	34	弥生土器		壺	口縁部	B-10	明赤褐色	明赤褐色					金雲母				良	
	35	弥生土器		壺	胴 部		にぶい褐色	にぶい褐色					金雲母				良	
	36	弥生土器		壺	胴 部	T6・7	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色					金雲母				良	
	37	弥生土器		壺	胴 部	B-13	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	○				金雲母				良	
	38	土師器		甕	口縁部		にぶい褐色	黒褐色	○								良	
	39	土師器		甕	口縁部	B-14	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	○				金雲母				良	
	40	土師器		甕	口縁部	B-13	黒褐色	灰褐色	○				金雲母				良	
	41	土師器		甕	口縁部	B-14	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	○				金雲母				良	溝状遺構内出土
	42	土師器		甕	胴 部		灰オリーブ色	褐灰色									良	
	43	土師器		甕	脚 台	B-13	淡茶褐色	淡茶褐色	○	○			金雲母				良	
	44	土師器		壺	口縁部	B-14	淡茶褐色	淡茶褐色	○								良	溝状遺構内出土
	45	土師器		埴	底 部	B-14	明褐色	明褐色									良	溝状遺構内出土

挿図	番号	種 類	形 式 等	器 種	部 位	出 土 区	層	色 調		胎 土					法 量 (cm)			焼 成	備 考
								内 面	外 面	状 態	石 灰	長 石	角 閃	他	口 径	高 さ	底 径		
8	46	土師器		鉢	完形品	B-13	II								16	7	6	普	丹 塗 り
	47	土師器		鉢	口縁部	B-14	II	にぶい黄橙色	にぶい橙色									普	
	48	土師器		小 鉢	胴 部			にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	○								良	
	49	土師器		鉢	胴 部			灰茶褐色	黒褐色	○								良	部分的に赤茶褐色
	50	土師器		高 坏	脚 部	t-1		にぶい褐色	にぶい褐色									普	
	51	土師器		高 坏	脚 部			にぶい褐色	にぶい褐色					金雲母				良	
	52	土師器		手づくね	完形品	B-14	II	黄褐色	黄褐～黒褐色	○					5	3.5	0.7	良	
9	53	土師器		碗	完形品										8.3	8	4.1	良	
	54	土師器		坏	完形品	B-13	II	橙 色	橙 色						10	4.15	18.7	良	
	55	土師器		坏	完形品										6.4	5.5	2.8	良	
	56	土師器		碗	完形品										6.1	4	3.6	良	
	57	土師器		碗	口縁部			にぶい橙色	にぶい橙色						20.5			良	
	58	土師器		碗	口縁部			浅黄橙色	浅黄橙色						18			良	
	59	土師器		碗	口縁部	B-13	II	橙 色	橙 色						15.8			良	
	60	土師器		碗	口縁部	B-14	II	灰黄色	灰黄色						15.2			良	
	61	土師器		碗	胴～底部			にぶい黄橙色	にぶい黄橙色								7.6	良	
	62	土師器		碗	底 部			浅黄橙色	浅黄橙色								8.1	良	
	63	土師器			底 部			暗灰黄色	にぶい橙色									良	
	64	土師器			底 部	B-10		にぶい橙色	にぶい橙色								6.4	良	
	65	土師器		坏	底 部	B-13		にぶい黄橙色	浅黄橙色								6.3	良	
	66	土師器		坏	底 部	B-13	II	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色								5.3	良	
	67	土師器	内黒土師器	碗	口縁部	B-13	II	黒 色	にぶい黄橙色						15.4			良	
	68	土師器	内黒土師器	碗	口縁部	B-13	II	黒 色	にぶい黄橙色									良	
	69	土師器	内黒土師器	坏	胴～底部	B-13	II	にぶい橙色	灰黄褐色								11.2	良	
	70	土師器	内黒土師器		胴 部	B-13	II	暗灰黄色	灰黄色									良	
	71	土師器	内黒土師器	碗	底 部	B-13	II	褐灰色	にぶい黄橙色								7.8	良	
	72	土師器	内黒土師器	碗	底 部			黄灰色	にぶい黄橙色								7.4	良	
	73	土師器	内黒土師器	碗	底 部	B-13	II	灰黄褐色	にぶい黄橙色								7.9	良	
	74	土師器	内黒土師器	高坏	胴～底部	B-14	II	灰黄褐色	にぶい黄橙色									良	
10	75	土師器		小 皿	完形品	B-13	II	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色						10	2.1	7.2	良	底部へら起し
	76	土師器		小 皿		B-13	II	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色						8.8	1.2	6	良	底部へら起し
	77	土師器		小 皿		B-13	II	橙 色	にぶい橙色						9.4	1.4	7.4	良	底部へら起し
	78	土師器		小 皿				褐灰色	にぶい橙色						9	1.5	7.8	良	底部へら起し
	79	土師器		小 皿		B-13	II	灰白色	にぶい橙色						9.6	1	7.8	良	底部へら起し
	80	土師器		小 皿		B-13	II	にぶい橙色	にぶい橙色						9.6	2	6.1	良	底部へら起し
	81	土師器		小 皿				にぶい黄褐色	にぶい黄褐色						9.2	1.2	7.3	良	底部へら起し
	82	土師器		小 皿				にぶい黄褐色	にぶい橙色						9.7	1.2	8	良	底部へら起し
	83	土師器		小 皿		B-13	II	にぶい橙色	浅黄褐色						9	1.1	6.8	良	底部へら起し
	84	土師器		小 皿		B-13	II	橙 色	橙 色						8.8	1.4	6.6	良	底部へら起し
	85	土師器		小 皿		B-14	II	にぶい橙色	にぶい黄褐色						9	1.4	7.6	良	底部へら起し
	86	土師器		小 皿				橙 色	橙 色						8.8	1.7	6.2	良	底部へら起し
	87	土師器		小 皿		B-13	II	にぶい橙色	にぶい黄褐色						9.8	1.5	7	良	底部へら起し
	88	土師器		小 皿		B-14	II	橙 色	にぶい橙色						9	1.1	7	良	底部へら起し
	89	土師器		小 皿		B-13	II	にぶい橙色	にぶい橙色						9.8	1.5	7.6	良	底部へら起し
	90	土師器		小 皿		B-13	II	橙 色	にぶい黄褐色						8.8	1.5	5.8	良	底部へら起し

挿図	番号	種 類	形 式 等	器 種	部 位	出 土 区	層	色 調		胎 土				法 量 (cm)			焼 成	備 考
								内 面	外 面	状態	石英	長石	角閃	他	口径	高さ		
10	91	土師器		小 皿	底 部	B-13	Ⅱ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色					9.4	1.3	7.4	良	底 部 へ ら 起 し
	92	土師器		小 皿	胴～底部	B-13	Ⅱ	浅黄橙色	にぶい赤褐色					7.8	1.1	8.8	良	底 部 へ ら 起 し
	93	土師器		小 皿	口縁部			にぶい褐色	にぶい黄褐色					9.2	1.4	8.9	良	底 部 へ ら 起 し
	94	土師器		小 皿	底 部	B-13	Ⅱ	明赤褐色	暗赤褐色					8.4	1.25	8.4	良	底 部 へ ら 起 し
	95	土師器		小 皿	口縁部	B-13	Ⅱ	暗赤褐色	浅黄橙色					9.6	1.4	7.8	良	底 部 へ ら 起 し
	96	土師器		小 皿	胴 部			浅黄橙色	にぶい赤褐色					8.5	1.3	8.7	良	底 部 へ ら 起 し
	97	土師器		小 皿	胴 部	B-13	Ⅱ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色					7.4	1.1	5.4	良	底 部 へ ら 起 し
	98	土師器		小 皿	口縁部	B-13	Ⅱ	赤茶褐色	淡褐色							6.4	良	底 部 へ ら 起 し
11	99	土師器		小 皿	口縁部	B-13	Ⅱ	灰黄褐色	灰黄褐色					9.1	1.8	8.5	良	底 部 糸 切 り
	100	土師器		小 皿	口縁部	B-13	Ⅱ	にぶい褐色	にぶい褐色					8.8	1.8	8.8	良	底 部 糸 切 り
	101	土師器		小 皿	口縁部	B-10	Ⅱ	にぶい褐色	にぶい黄褐色					10.2	1.2	8	良	底 部 糸 切 り
	102	土師器		小 皿	口縁部	B-13	Ⅱ	灰黄褐色	灰黄褐色					9.2	1.7	8	良	底 部 糸 切 り
	103	土師器		小 皿	口縁部									4.2	1.3	3.2	良	底 部 糸 切 り
	104	土師器		小 皿	口縁部	B-13	Ⅱ	にぶい橙色	橙 色					8	1.5	5.4	良	底 部 糸 切 り
	105	土師器		小 皿	胴 部	B-13	Ⅱ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色					11.3	1.9	7.2	良	底 部 不 明 瞭
	106	土師器		小 皿	胴 部	B-13	Ⅱ	橙 色	橙 色					9.2	1.85	8.8	良	底 部 不 明 瞭
	107	土師器		小 皿	胴 部			にぶい褐色	にぶい褐色					8.8	1.5	5.8	良	底 部 不 明 瞭
	108	土師器		小 皿	胴 部			橙 色	にぶい褐色					8.8	1.2	8.8	良	底 部 不 明 瞭
	109	土師器		小 皿	胴 部			にぶい褐色	灰白色					7.3	1.1	8.8	良	底 部 不 明 瞭
	110	土師器		小 皿	口縁部			橙 色	橙 色					8.8	0.9	8.8	良	底 部 不 明 瞭
	111	土師器		小 皿	胴 部			橙 色	橙 色					8	1	8.8	良	底 部 不 明 瞭
	112	土師器		小 皿	胴 部			にぶい褐色	にぶい褐色					9.8			良	底 部 不 明 瞭
	113	土師器		小 皿	胴 部	B-13	Ⅱ	にぶい褐色	にぶい褐色					8.2	1.8	6	良	底 部 不 明 瞭 断面 赤 褐 色
	114	土師器		小 皿				にぶい黄褐色	にぶい褐色							6.1	良	底 部 不 明 瞭
115	土師器		甕	口縁部												良		
116	土師器		甕	口縁部												良		
12	117	須 恵 器		坏	口縁部	B-13	Ⅱ										良	
	118	須 恵 器		坏	口縁部												良	
	119	須 恵 器		坏	底 部	B-13	Ⅱ									5	良	底 部 へ ら 起 し
	120	中世須恵器	備前系	すり鉢	底 部											12.5	良	
	121	中世須恵器	東播磨系	こね鉢	口縁部												良	
	122	中世須恵器	東播磨系	こね鉢	底 部											9.2	良	
	123	瓦質土器		椀	底 部	B-13	Ⅱ									8	良	
	124	須 恵 器		甕	口縁部	B-13	Ⅱ										良	
	125	須 恵 器		甕	口縁部	B-13	Ⅱ							21.2			良	
	126	須 恵 器		壺	口縁部												良	
	127	須 恵 器		甕													良	断 面 赤 褐 色
13	128	白 磁	玉縁口縁	椀	口縁部	B-13	Ⅱ							22			良	
	129	白 磁	玉縁口縁	椀	口縁部									18.8			良	
	130	白 磁	玉縁口縁	椀	口縁部	B-13	Ⅱ							17.8			良	
	131	白 磁	玉縁口縁	椀	口縁部	B-13	Ⅱ							18.4			良	
	132	白 磁	玉縁口縁	椀	口縁部	B-13	Ⅱ							15.4			良	
	133	白 磁		椀	口縁部												良	
	134	白 磁		椀	口縁部	B-13	Ⅱ										良	
	135	白 磁		椀	口縁部	B-11	I・Ⅱ										良	

挿図	番号	種 類	形 式 等	器 種	部 位	出 土 区	層	色 調		胎 土				法 量 (cm)			焼 成	備 考	
								内 面	外 面	状態	石英	長石	角閃	他	口径	高さ			底径
13	136	白 磁		碗	底 部											6.4	良		
	137	白 磁		碗	底 部	B－13	Ⅱ									7.7	良		
	138	白 磁		碗	底 部	B－13	Ⅱ									7.3	良		
	139	白 磁		碗	底 部	B－13	Ⅱ									5.8	良		
	140	白 磁		碗	底 部														
	141	陶 器															良		
	142	陶 器	天目茶碗	碗	完成品												良		
	143	青白磁	合 子	身													良		
	144	紡錘車															良		
	145	カマド形 土 製 品																	
	146	滑石転用品																	
	147	滑石転用品																	
14	148	近世陶磁器		小 坏		B－11									5.2	3.2	3.2	良	
	149	近世陶磁器	染 付	碗		B－11									11.2	8	4.2	良	
	150	近世陶磁器	蛇褐釉	碗											10.8	5.8	8.8	良	
	151	近世陶磁器		碗	底 部	B－11	I・Ⅱ										4.4	良	
	152	近世陶磁器		碗	底 部	B－11	I・Ⅱ										4.8	良	
	153	近世陶磁器		碗	口縁部	B－11									8.8			良	
	154	近世陶磁器		皿		T1									11	2	5.8	良	
	155	近世陶磁器		高台付皿											4.8	3.8	2.2	良	
	156	近世陶磁器		高台付皿											5.9	3.5	2.3	良	溝状遺構内出土
	157	薩 摩 焼	加治木始	火入れ鉢											9.5	4.7	4.2	良	
	158	近世陶磁器		ことぼし	底 部	B－11	Ⅱ										5.8	良	
	159	近世陶磁器		徳 利	口縁部	B－12	Ⅱ								8.8			良	
	160				底 部	B－13	Ⅱ										6.6	良	
	161	近世陶磁器	鯨肌釉 (龍門司)	茶入れ											8	8.7	7.4	良	
	162	近世陶磁器		甕	口縁部	B－11	I・Ⅱ	にぶい赤褐～灰赤色	灰黄褐色									良	
15	163	近世陶磁器		蓋		B－11	I・Ⅱ	赤褐色	灰黄褐色									良	
	164	近世陶磁器		茶 家	口縁～胴部	B－11									8.8			良	
	165	近世陶磁器		壺	口縁～胴部	B－14									14.4			良	
	166	近世陶磁器		すり鉢	底 部	B－11	I・Ⅱ										11.2	良	
	167	近世陶磁器		甕	口縁～胴部	B－14		赤灰色	暗赤灰色						17.7			良	口唇部に貝目
	168	近世陶磁器		甕	底 部	B－11											12.8	良	
	169	瓦	瓦			B－15													

挿図	番号	種 類	石 材	出土区	層	法 量 (cm)			備 考
						幅	厚	長さ	
16	170	石 斧	頁 岩	T6・7		5.2	1.6	6	
	171	石庖丁	頁 岩	B-13	II	10.8	1.2	4.7	使用痕分析済
	172	石庖丁	頁 岩	B-14	II	6.5	0.7	5.4	使用痕分析済
	173	磨・敲石	安山岩	B-14		10.2	4.5	10.2	
	174	磨・敲石	砂 岩	B-13	II	5.5	4.5	10.2	
	175	磨・敲石	安山岩	T1		7.1	4.8	7	
	176	提げ砥石か	安山岩	B-13	II	3.9	1.7	8.2	
	177	砥 石	砂 岩	B-13	II	9.5	4.4	7.7	

第Ⅴ章 調査のまとめ

第1節 遺構について

遺構としては、竪穴建物跡に類似した遺構などが検出された。竪穴建物跡は、飯村均氏によると、東北地方の竪穴建物跡を述べる中でこの特徴について「一辺2～4mの方形を基調とする。堆積土は人為的埋め戻しである。共伴遺物がない。床面が踏み締まっているものが少ない。長期の使用が認められない。」（飯村 1994）などを挙げている。当遺跡検出の資料も、先に挙げた特徴が認められる。県内の竪穴建物跡については堂込秀人氏によって集成と検討がなされている（堂込1999）が、これらを参考にしながら該期の周辺遺跡との関係を明らかにする必要がある。ただし、埋土中から縄文土器・土師器などが出土しているが、時期判断については確実ではない。中世前半期に多くみられる竪穴建物跡に形態は類似はしているが、中世の遺物の出土がみられず、古代の土師器がもっとも新しい時代の遺物であることから古代の竪穴遺構の可能性もある。今後、古代の事例（上床2000など）と中世の事例との両面から比較検討する必要がある。

第2節 遺物について

遺物は、Ⅱ層からⅢ層にかけて出土し、縄文時代から古代・中近世にかけてのものが混在している状況であった。よって、調査においては総てを一括し一般遺物として取り上げている。この中でも、古代から中世にかけての遺物が比較的まとまって出土している。

古代・中世に属する遺物には土師器・須恵器・陶磁器・滑石製品などがみられた。これらの遺物はおおまかには3時期に分類することができる。

まず土師器坏・小皿の底部が回転へう起こしであることから9、10世紀頃の時期が考えられる一群について説明する。当該時期の遺物として、土師器の坏・碗・小皿、須恵器の坏・甕・壺、カマド形土製品、土師器坏底部転用の紡錘車がある。

特にこれらの遺物の中でカマド形土製品については移動式カマドの口縁部の可能性がある。破片であるため全形が判断しがたいが、甕の受け口（口縁部）から焚き口にかけての部分であると考えられる。県内では始良町萩原遺跡での出土例が知られているほかは類例がほとんどみられなかったが、最近になって溝辺町東免遺跡で完形復元が可能な資料が発見されている。これまで県内では地床炉は多く発見されているが、古代の作りつけカマドはほとんど発見されていないため、非カマド地域であるといわれてきた。このような状況の中ではこれらの移動式カマドについては注目すべきであり、県内の食文化の様相を明らかにするうえで検討が必要であるといえよう。

これらの遺物はさらに9世紀代と10世紀代に細分できる可能性がある。例えば須恵器の坏などは9世紀代の古い段階に位置づけられるし、黒色土器碗及び柱状高台の土師器碗などは9世紀末から10世紀初め頃に位置づけることができる。しかしながら資料数の制約もあるので、ここではおよそ9、10世紀頃であるとしておきたい。

次に分類されるのが玉縁口縁のものを中心とする白磁碗のみが出土し青磁碗が出土していないこと、土師器小皿の底部が回転糸切りであるなどの理由から11世紀後半から12世紀頃の時期が考えられる一群である。当該時期の遺物として、土師器小皿、玉縁口縁の白磁碗などがある。

また、他の中世に属する遺物として、備前系陶器のすり鉢、東播磨系陶器のこね鉢、青白磁の合子、天目茶碗などがある。これらは13世紀から15世紀ごろのものと考えられる。また、時期不明の須恵器がある。外面は格子目であるが、内面には特殊なタタキが施されるものである。表面は青灰色であるが、割れ口から判断される内面の色は赤みがかかっており、一見南島に多くみられるカムィヤキに類似している。古代の須恵器である可能性もあるが、もしカムィヤキであれば周辺地域で出土した例がなく検討を要する資料である。これらの資料は当遺跡が中世に断続的にせよ長時間にわたって使用されたものである可能性を示している。

古代から中世にかけての編年は、中村和美氏によって精力的に進められている（中村1994・中村1997）。しかし、大隅半島東部の様相は比較材料が少なく、薩摩半島を主に構築された編年がそのまま通用するのさえはっきりしていない。地理的な状況から、宮崎との関連なども考慮したうえで述べなくてはならない。

石器に関して注目されるのが、石庖丁である。当遺跡からは2点が出土した。永濱功治氏によると、鹿児島県内で発見されている資料は80遺跡120点である。当遺跡のものは、これまでの出土状況などから弥生時代もしくは古墳時代のものであると思われる。しかしながら、資料の使用痕などの観察を行ったが、両者ともその痕跡を見いだすことが出来なかった。使用の有無や対象物の検討などは今後に残された課題であるといえよう。

参考文献

- 飯村 均 1994「中世の『宿』『市』『津』」『中世都市研究』第3号
- 上床 真 2000「薩摩・大隅の古代の竪穴遺構－竪穴住居の終末に関する考察－」『Fragments』第2号 さくら研究会
- 堂込 秀人 1999「中世南九州の竪穴建物跡」『南九州城郭研究』創刊号 南九州城郭談話会
- 東比 中世考古学会編 2001『掘立と竪穴』 高志書院
- 永濱 功治 2003「石庖丁の使用痕分析」『研究紀要 縄文の森から』創刊号 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 中村 和美 1994「鹿児島県（薩摩・大隅国）における平安時代の食器について－土師器の変遷を中心に－」『中近世土器の基礎的研究』X 日本中世土器研究会
- 中村 和美 1997「鹿児島県における古代の在地土器」『鹿児島考古』第31号 鹿児島県考古学会

版 圖



竪穴建物跡・溝状遺構検出状況



竪穴建物跡内軽石出土状況



竪穴建物跡・完掘状況



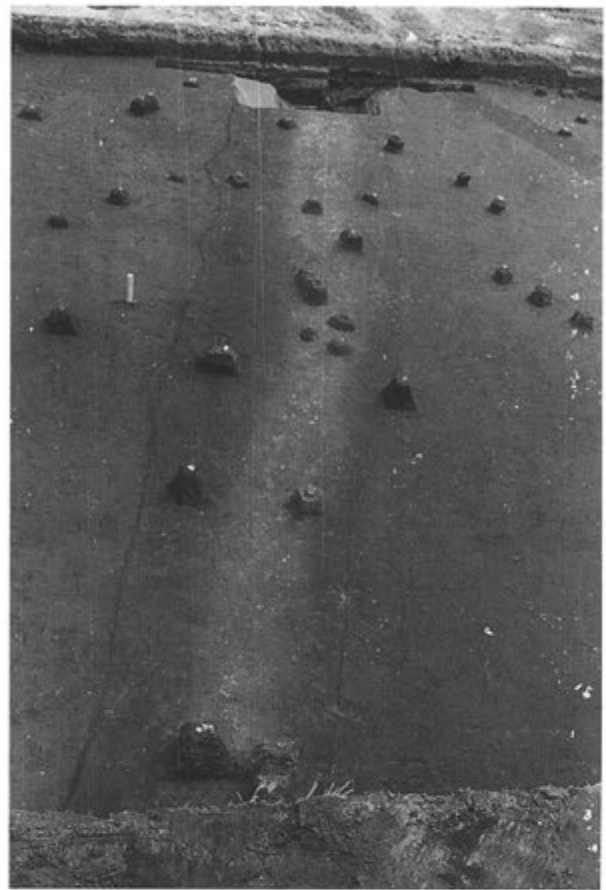
軽石石列検出状況



土坑検出状況



土坑完掘状況



溝状遺構検出状況



溝状遺構埋土の状況



溝状遺構の切り合い状況



溝状遺構の切り合い状況



溝状遺構完掘状況



溝状遺構完掘状況



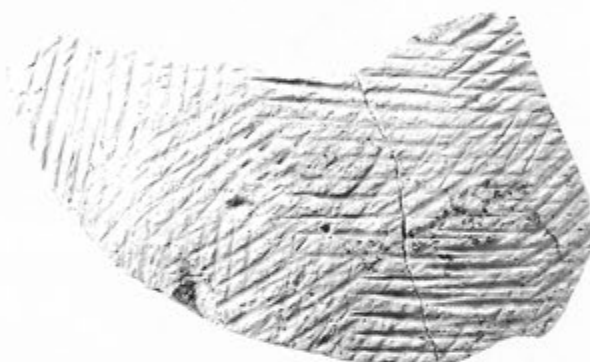
遺物出土状況



2



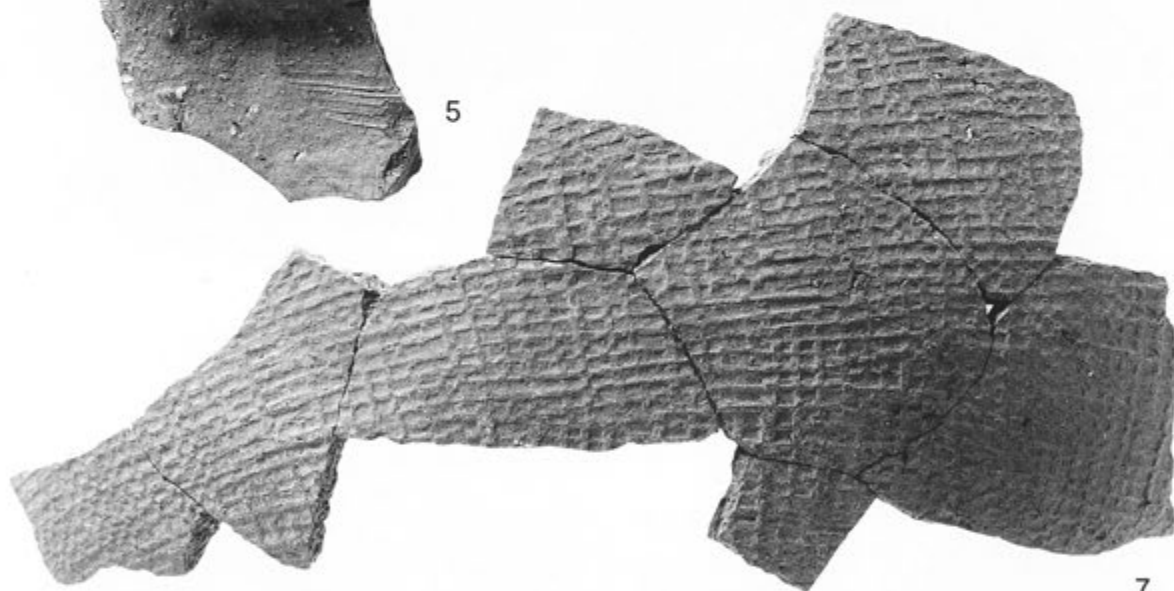
3



6

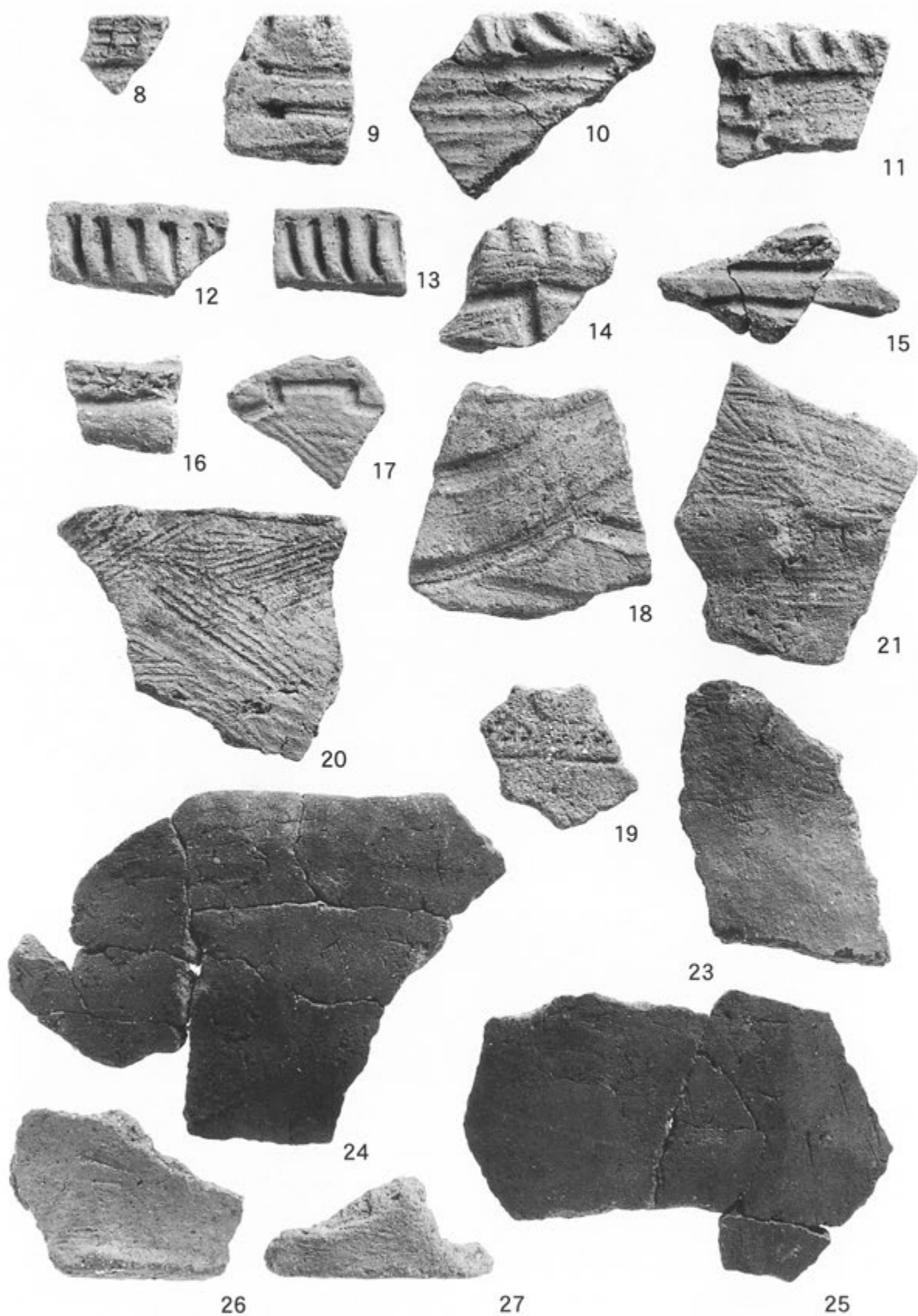


5

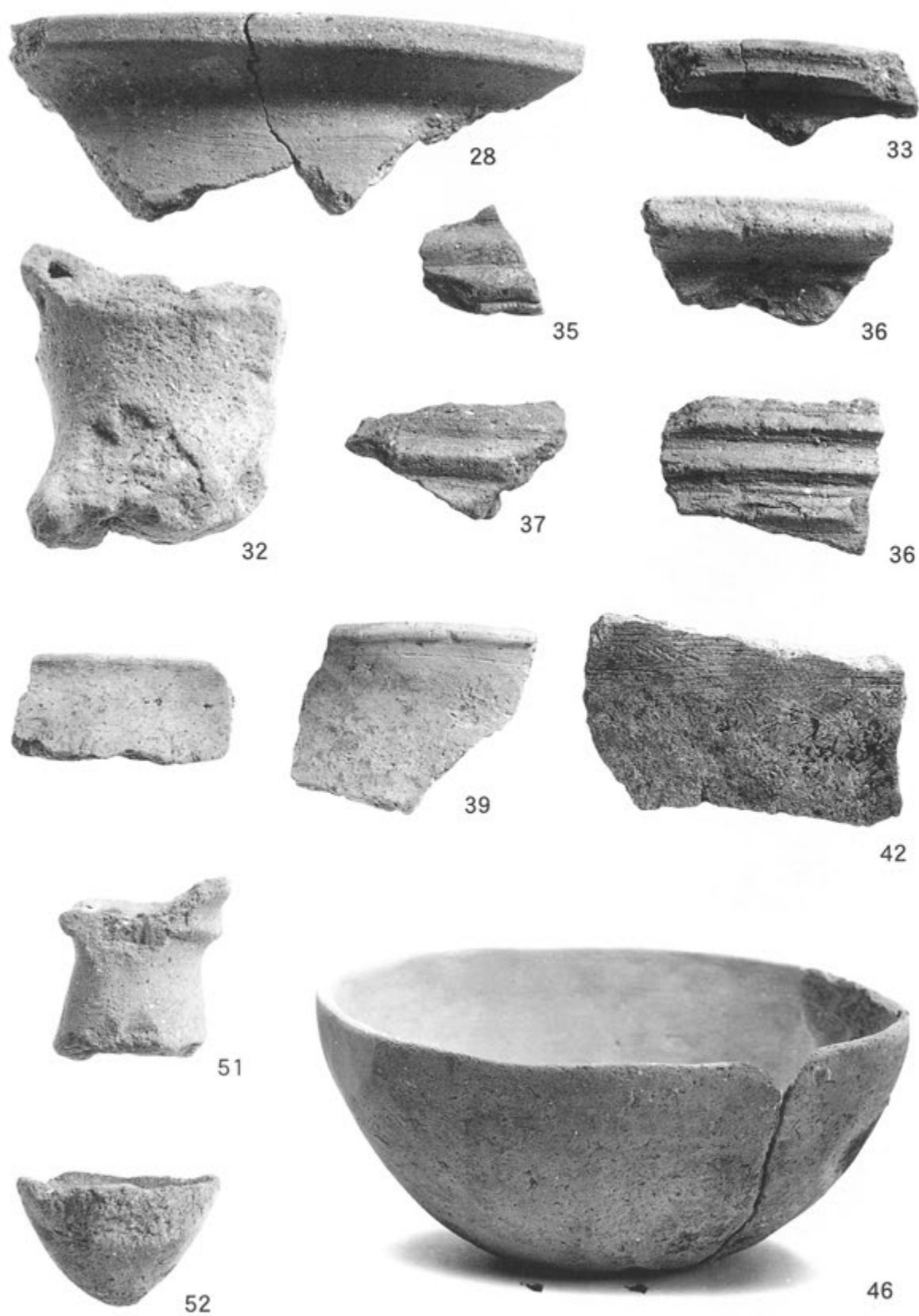


7

遺構内出土遺物



縄文時代の遺物



弥生・古墳時代の遺物



55



53



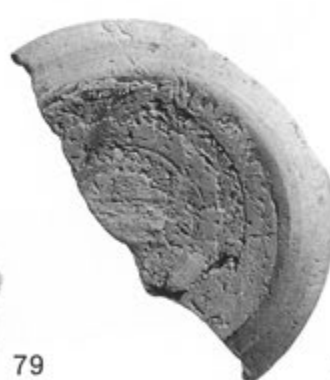
75



80



79

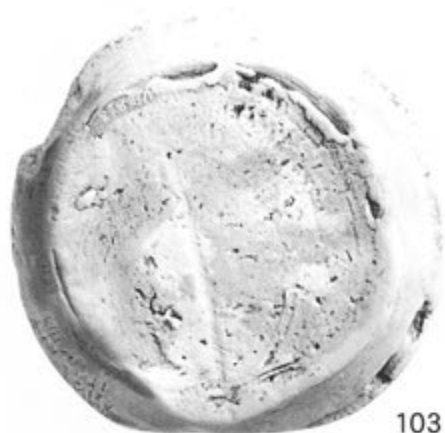


76



98

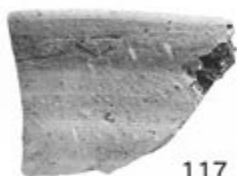
古代・中世の遺物



103



99



117



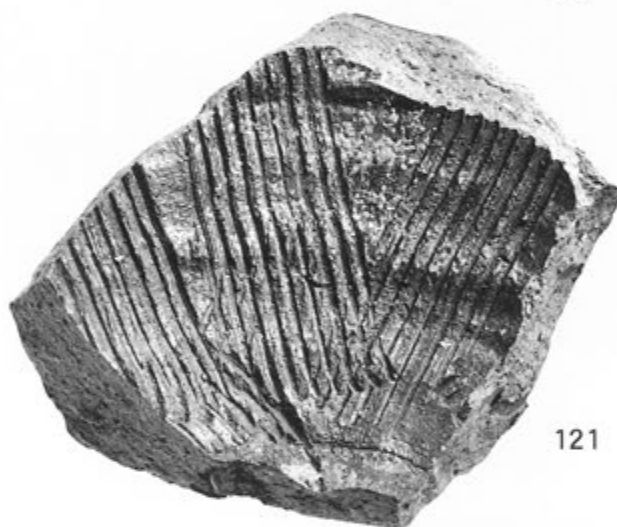
118



120



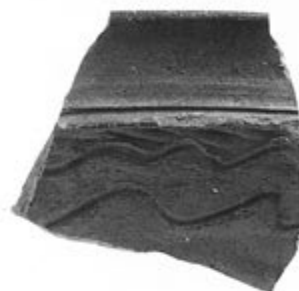
125



121

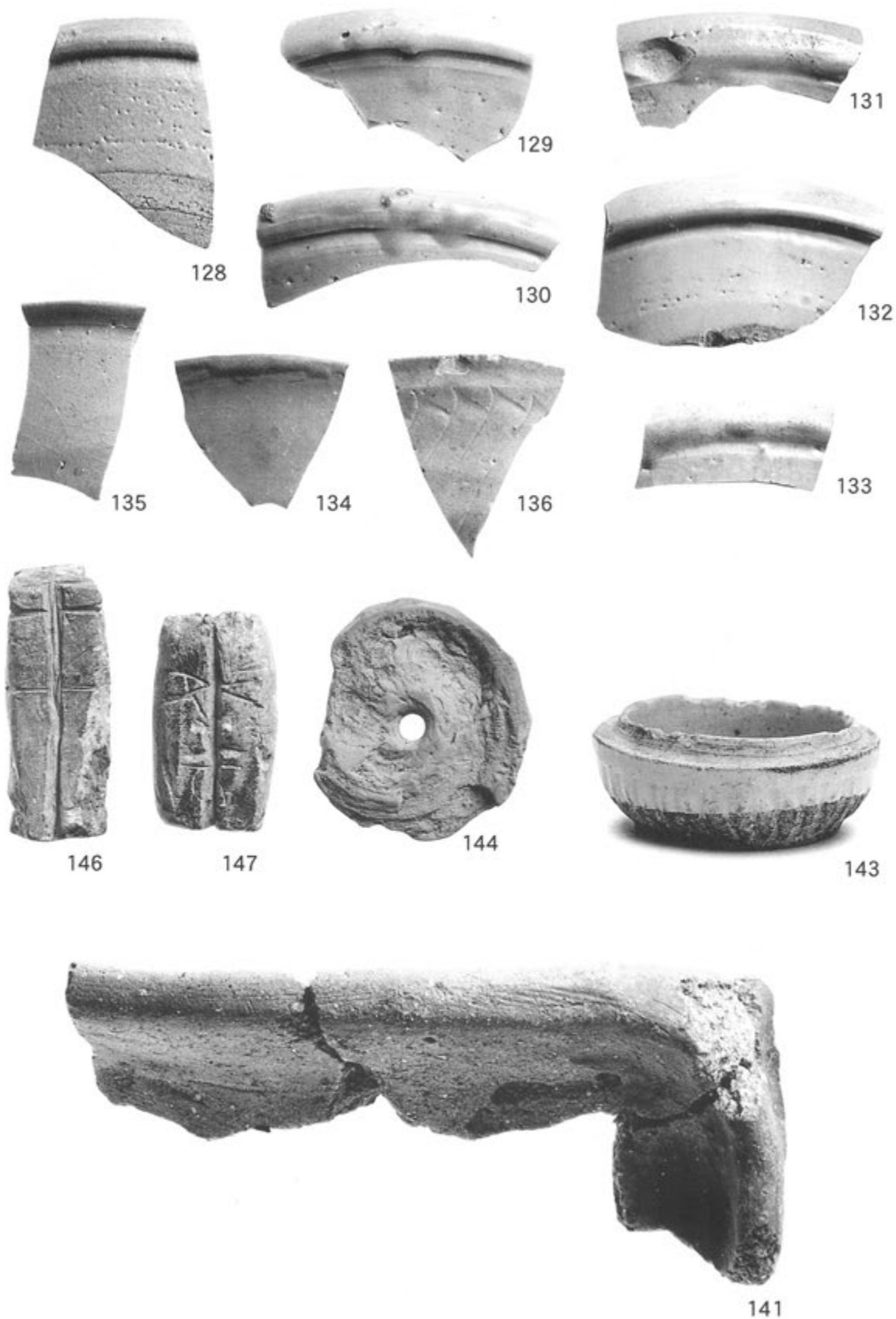


124



126

古代・中世の遺物



古代・中世の遺物



149



150



148



155



158



157

近世の遺物



171



172



170



176



175



177



173

石 器

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (66)

国道448号線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

後 迫 遺 跡

発 行 日 平成15年12月26日

発 行 者 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175番地 1

☎ (0995) 48-5811

印 刷 所 有限会社 梅 木 印 刷

鹿児島県始良郡始良町三拾町1888

☎ (0995) 67-2256

